

基調講演 I 「朝鮮半島，吉備，そして備後の寺々」

岡山理科大学大学院 教授 亀田 修一

1 はじめに

岡山理科大学の亀田でございます。きょうはよろしくお願いたします。

今日は【スライド1】に書いておりますような流れでお話をしたいと思いますが、今回の講演をするにあたりまして主催者からいろいろ御注文がございました。基本的にはお寺の話なのですが、先ほど、伊藤さんがお話しされたような古墳時代の朝鮮半島との関係や白村江の戦いについても何か話をしてほしい



ということでした。私の場合、あまり話が上手ではありませんので、話よりは絵を見ていただいたほうがいいかなと思ひまして、スライドをかなりたくさん準備いたしました。ということで早速、進めていきたいと思ひます。

本日は「朝鮮半島，吉備，そして備後の寺々」という題でお話いたします。吉備

かめだしゅういち
亀田修一

1953（昭和28）年福岡県生まれ。九州大学大学院文学研究科修了。1980（昭和55）年から岡山理科大学に勤務。2012（平成24）4月より、生物地球学部教授。博士（文学）。

古代の日韓関係に関する研究を中心に日本の古代寺院や吉備の古代史についても幅広く研究。

最近の著書に『日韓古代瓦の研究』（吉川弘文館2006）『吉備の古代寺院』（共著・吉備人出版2006），論文に「考古学からみた日本列島と朝鮮半島の交流」（2011），「遺跡・遺物にみる倭と東アジア」（2010）「朝鮮半島における造瓦技術の変遷」（2009）など多数。

といひますと当然、備後も含むわけですが、ここでは備前・備中を備後と対比する形で話をしたいと思ひます。

2 朝鮮半島の古代寺院と瓦

まず、これは朝鮮半島と日本の位置関係です【スライド2】。グーグルの写真のコピーしたのですが、皆さん御存じのように、このあたりが吉備、その東に大和・河内があつて、こちら

に筑紫があります。それから朝鮮半島には高句麗、百濟、新羅、伽耶がありまして、現在のソウルを中心として、このような位置関係になっております【スライド3】。

(1) 高句麗

当時の朝鮮半島の国々の中で、北方の高句麗というのは強大な国なのですが、

北西部で中国と国境を接するものですから、どうしても南下政策をとらざるを得ません。それからこのあたりは寒いですよ。ですから、当然、南の暖かいところに行きたいということも含めて、南下政策というのが出てくるものと思っております。ですから、高句麗のもともとの中心というのは今の中国との国境地帯にある桓仁や集安あたりですが、のちに現在のピョンヤン

(平壤)のほうに移っていくというように、南下しています。先ほど、伊藤さんのお話にあった4世紀の終わりから5世紀の初め頃といたしますのは、まさにその大きな動きの時期でして、その高句麗の南下によって朝鮮半島南東部地域の人々やいろんなものが日本列島に入ってくるのです。その影響は岡山や広島という瀬戸内海沿岸地域にも当然入ってきているわけですが、この5世紀代のお話はちょっと後でさせていただくとして、メインテーマであります7世紀のお話をまず進めていきたいと思っております。

講演の章立て ()内の数字は本書のページ番号

- 1 はじめに.....(28)
- 2 朝鮮半島の古代寺院と瓦.....(28)
 - (1)高句麗
 - (2)新羅
 - (3)百濟
- 3 飛鳥の古代寺院と瓦.....(49)
- 4 吉備の古代寺院と瓦.....(57)
 - (1)寺院造営以前の吉備と朝鮮半島
 - (2)吉備の古代寺院と瓦
- 5 備後の古代寺院と瓦.....(74)
 - (1)備後寺町廃寺
 - (2)備後中谷廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦
- 6 備中と備後の瓦が語るもの.....(81)
- 7 白村江の戦いと吉備、備後の古代寺院.....(82)

【スライド1】「講演の章立て」



【スライド2】「中国・朝鮮半島と日本列島」



【スライド3】「朝鮮半島の古代寺院と瓦」

まず、高句麗に関しましては、寺院の軒丸瓦の文様【スライド4】を見てください。普通は蓮の花びらをデザインした文様が基本なのですが、高句麗では、蓮のつぼみを意識したデザインを比較的多く使用しています。ここに見ていただいている中央上の瓦はお墓に使われたものでして、高句麗ではお墓にも瓦を使います。ほかにこの中央下の瓦のように鬼の顔をデザインしたものなどもあります。あとで百濟，新羅の瓦を紹介しますが、高句麗の瓦には力強さが感じられるということが、僕の一番の感想です。



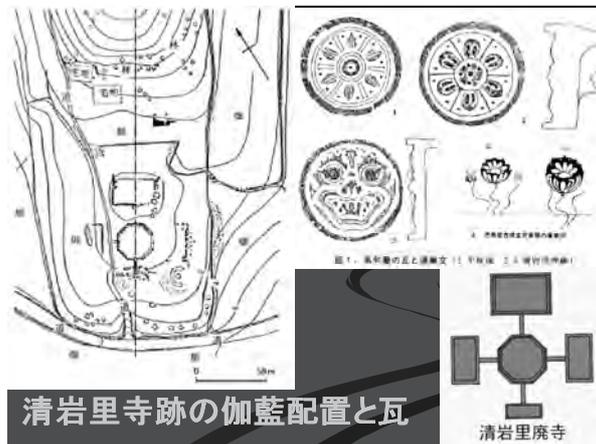
【スライド4】「高句麗の軒丸瓦の文様」

高句麗の代表的寺院に、清岩里寺跡というお寺の跡がありますが、これは清岩里土城と呼ばれる土で造られた城壁で囲まれたお城の一角にあるお寺の跡です【スライド5】。この右手の点々のところがお寺さんで、こちらの左手の点々のところがお役所的な建物かなと思われま



【スライド5】「清岩里寺跡の位置」

す。この清岩里土城の西側は、現在の平壤の中核部になります。ここで高句麗独特のデザインの軒丸瓦がいくつか出土しています。時期に関しましては、正確にはわからないのですが、大体、5世紀の終わりぐらいだろうと推定されています。清岩里寺跡の特徴としましては、塔の基壇の形が珍しいです【スライド6】。日本の古代寺院の塔の基壇は、ほとんど四角形なのですが、



【スライド6】「清岩里寺跡の伽藍配置と瓦」

高句麗の場合は八角形のものがあります。日本では、八角形のこのような塔は、京都の秦氏に関係すると言われていた檜原廃寺（かたぎはらはいじ）というお寺さんにありますが、日本の古代寺院で確実なものはこれ以外にはよく知りません。

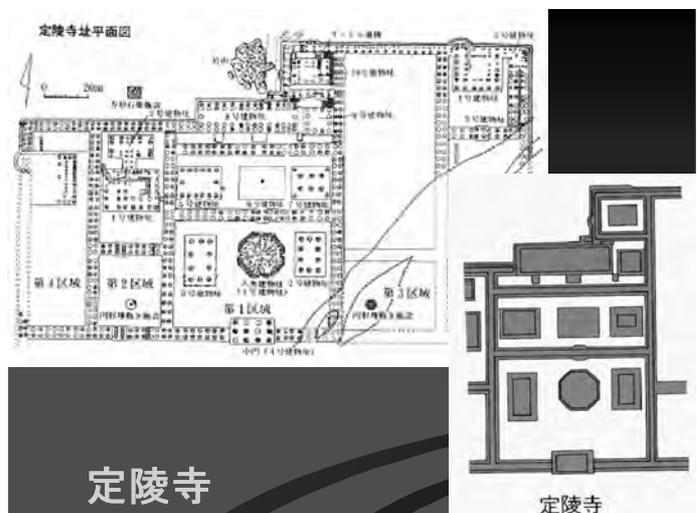
それからもう一つの特徴は、あとでお話しする日本との関係で言いますと、塔の後ろに金堂（本堂）があるのですが、これが塔の東西にもう一つずつあって、塔を囲むような形で金堂が三つあるのです。これが特徴です。これと同じような伽藍配置を持つお寺に日本の飛鳥寺があります。最近ではこれに関していろいろな意見が出されていますが、日本と高句麗の関係で共通点としてよく取り上げられるのがこの伽藍配置の特徴です。

この【スライド7】は定陵寺跡と伝東明王陵で、これは5世紀の終わりぐらいのものです。画面の左端が古墳（伝東明王陵）で、その古墳の横にお寺があります。伽藍配置【スライド8】を見ますと、ちょっとずれているのですが、一応、これも一塔三金堂のような形になっていると考えられています。ただ、塔の後ろ（北）の金堂は、廊下でふさがれていまして、少し特異な構造をしています。

このように八角形の塔があるという点が、高句麗の古代寺院の大きな特徴の一つかと思います。



【スライド7】「定陵寺と伝東明王陵（5世紀末以降）」



【スライド8】「定陵寺の伽藍位置」

(2) 新羅

次に新羅にいきます。順番から言いますと百済が先なのでしょうが、百済はあとの話と関係が深いので、先に新羅を見ておきます。

新羅は、皆さん旅行された方も多いかと思いますが、これが月城、あるいは半月城と呼ばれている土城です【スライド9】。三日月の形をしていることから、このように呼ばれています。川に沿って三日月形の小高い丘があって、ここに王宮があったと言われていいます。その王宮の横に雁鴨池という庭園があり、その向こうが皇龍寺というお寺さんです。このお寺さんは国家がつくった寺院で、もともと宮殿にしようとしたのですが、龍が出てきたので、やめてお寺にしたといわれている寺です。

これ【スライド10】が上から見た皇龍寺の跡で、553年に建てられ始めたものです。方形の塔や本堂（金堂）がありまして、【スライド11】のほうがわかりやすいと思いますが、九層の塔の後ろに中金堂があり、その横に西の金堂、東の金堂、そして中金堂の後ろに講堂があります。ただ、金堂は三つ

(2)新羅



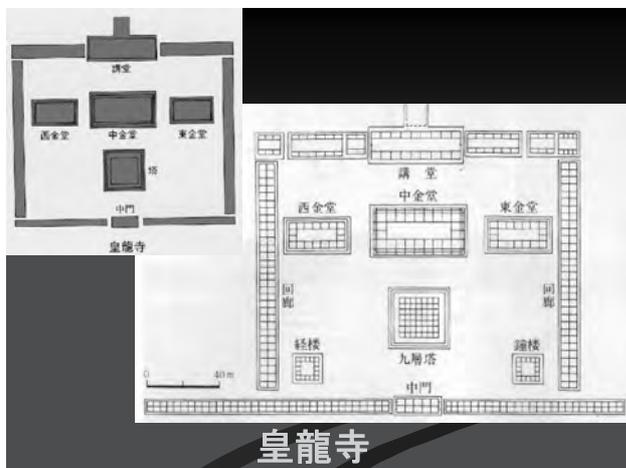
月城(後方が皇龍寺跡)(西より)

【スライド9】「新羅（月城と皇龍寺）」



皇龍寺(真興王14年[553]創建)

【スライド10】「皇龍寺（真興王14年 [553] 創建）」



皇龍寺

【スライド11】「皇龍寺の伽藍位置」

あるのですが、高句麗のものとは違って東西一直線に並ぶ配置になっています。塔は九層塔と書かれています。このお寺さん自体は6世紀の中頃につくられ始めるのですが、この塔に関しましては、7世紀の半ばごろにつくられたといわれています。ちよ

うど日本では大和の百済大寺で九層の塔がつくられており、時期的に近いことからこの時期の東アジア世界ではこのような九層の塔が流行ったのではないかと考えられています。この皇龍寺の復元模型が【スライド12】で、この



皇龍寺復元模型

【スライド12】「皇龍寺の復元模型」

うような様子に復元されます。かなり圧迫感というか、高さがある構造になっています。このお寺さんから出てくるこの瓦【スライド13】は、一応、最近の意見では、高句麗系の軒丸瓦の一つと言われています。少しシンプルにな



皇龍寺
軒丸瓦

【スライド13】「皇龍寺の軒丸瓦」

なっていますが、先ほどの高句麗の蓮のつぼみをデザインしたものにボリューム感も類似しておりまして、そういう点では高句麗系のものかなと思っております。実は、新羅は先ほどお話しました高句麗が南下してきたときに、植民地とまではいきませんが、半分抑え込まれて半植民地状態となり、かなり高句麗の影響下に置かれたと考えられています。そして6世紀の前半



皇龍寺鴟尾
(高さ182cm)

【スライド14】「皇龍寺の鴟尾」

くらいによろやくちょっと力を盛り返してきますが、そういう状況下で、この皇龍寺が創建されますので、高句麗との関係はかなり深く、このような高句麗系の瓦が使用されたものと考えられます。

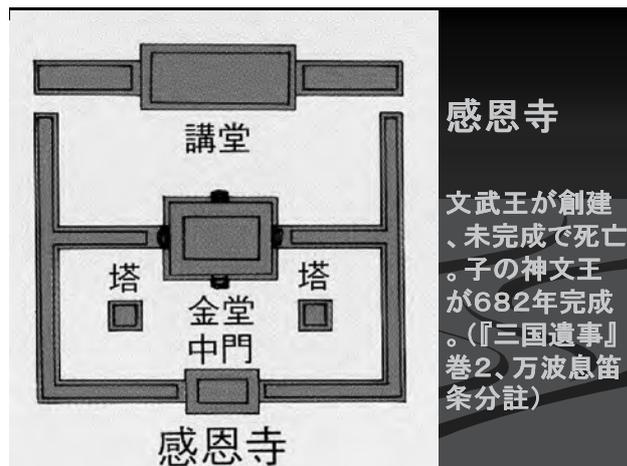
それから皇龍寺跡では、このような高さが2メートル近くもある巨大な鴟尾【スライド14】が出土しています。塔の基壇からは貴重な舍利荘嚴具が見ついています。お舍利はお釈迦様の骨に見立てた水晶だったりするのですが、そういうもの入れた立派な容器が出てきております【スライド15】。



皇龍寺塔舍利荘嚴具(7世紀中葉)

【スライド15】「皇龍寺の塔舍利荘嚴具(7世紀中葉)」

次に感恩寺です。これは図面だけなのですが、新羅のお寺さんと日本の関係を考えますときに、塔が2つあることから日本の奈良の薬師寺のモデルというふうに言われているものです。682年完成で、塔が2つありましてこのような配置になっています【スライド16】。



感恩寺

文武王が創建、未完成で死亡。子の神文王が682年完成。(『三国遺事』卷2、万波息笛条分註)

【スライド16】「感恩寺の伽藍配置」

それから、行かれた方も多いかと思いますが、仏国寺です。8世紀に入ってからのもので、このような山の中につくられています【スライド17】。



仏国寺

751年、景德王代、大宰相大城が創建し、774年、彼の死後、国家があとを承けて完成させた(『三国遺事』卷5、大城孝二世父母条)

【スライド17】「仏国寺」

もう少し古くからあったとも言われていますが、751年の景德王の時代に大宰相の金大城が創建し、774年に彼が死んだ後、国家があとを承けて完成させたと記録されています。それで良いと思います。

仏国寺の特徴の一つは入り口側の階段で、斜面にこのような立派な階段を造っています【スライド18】。石塔は2基ありますが、右（東）側の多宝塔は珍しい形をしています【スライド19】。この仏国寺の多宝塔に関してですが、日本の鳥取県に岡益石堂というちょっと変わった石塔があります。もしかしたら、この多宝塔の影響があるのかなとちょっと思っております。左（西）の釈迦塔の方からは、勾玉などを含む立派な舍利荘厳具が見つかっています【スライド20】。

ここで朝鮮半島の古代寺院の伽藍配置を簡単に整理しておきますと【スライド21】、高句麗ではさきほどお話ししましたように一塔三金堂形式の伽藍配置のものが確認されています。新羅でも一塔三金堂形式の伽藍配置はありますが、皇龍寺の場合は、三つの金堂が東西一直線に並んでいます。さきほどお話ししません



仏国寺

【スライド18】「仏国寺の階段」



仏国寺釈迦塔(左)・多宝塔(右)

【スライド19】「仏国寺の釈迦塔(左)と多宝塔(右)」



仏国寺釈迦塔舍利荘厳具

【スライド20】「仏国寺の釈迦塔舍利荘厳具」



【スライド21】「朝鮮半島古代寺院の伽藍配置」

でしたが、右側の芬皇寺ではちょっと見ますと三つの金堂が高句麗の例のようになってはいます。ただ、中金堂と東西金堂の角が接する位置にありますので、同時に建っていたのか気になるところです。それから統一新羅時代のところに挙げてありますが、二塔式のものが出てきます。この二塔式は7世紀末頃からです。

最後に百済ですが、基本的には中門，塔，金堂，講堂が南北一直線に並ぶ配置で、日本でいうところの四天王寺式です。ただ、最近の発掘調査で講堂の横などにいろいろな建物が建てられていることがわかってきました。日本では講堂の横には回廊がそのままつくのが一般的なのですが、本家である百済では少し複雑なようです。それからあとで紹介しますが、この右側のものが益山弥勒寺の伽藍配置です。一塔式の配置が東西に三つ並んでいる珍しいものです。

このように朝鮮半島の古代寺院の伽藍配置は、当然基本型はありますが、各地域で個性的なものが見られます。

(3) 百済

では次に百済についてですが、【スライド22】は昔作った資料で見にくいのですが、ご容赦下さい。かつて白村江と呼ばれたと考えられている錦江が北から流れてきて、大きく曲がる部分に泗泚の都城ができます。この都城を囲む土塁（羅城）があるのですが、南側には城壁はないということになっています。その中に、点々とあるのがお寺さんです。これらのお寺さんは、まず羅城内に造られ、その後羅城外に造られるようになるようです。最近は年号が記された資料が発見され、徐々に実態がわかってきました。



【スライド22】「百済（扶余付近の寺院等分布）」

これが有名な定林寺跡です【スライド23】。日本の四天王寺式伽藍配置のモデルのようなものだとされております。発掘調査でいろいろわかってまいりました。前面（南側）に池がありますが、このように南側に池を持つ例は日本ではよくわかっていません。池の近くの北側に中門があり、その北側に塔、金堂、講堂が直線的に並んでいます。講堂は、高麗時代に再建されたものを復元したのですが、その東西の回廊部分は最近発掘調査しましたら、またいろいろ違ったことがわかってきました。それから中央に見える塔は



【スライド23】「定林寺跡」



【スライド24】「大唐平百濟」銘石塔」

石の塔なのですが、百濟では石の塔は一般的ではありません。ですからこの石の塔が本当に百濟時代のものなのだろうかという意見も一方ではありますが、この石塔の向かって右側部分に、「大唐平百濟」と書いてあります【スライド24】。つまり、先ほど話したように、白村江の戦いの前、660年に唐と新羅の連合軍が百濟を滅ぼします。このときに、唐の進駐軍がまさに百濟の中核のお寺の貴重な塔に、我々が百濟を滅ぼした（「平百濟」）と書き込んでいるわけです。ということは、この時には当然、この石塔は建っていたことになるわけで、そういう証拠にもなる石塔です。百濟の考古学的研究の中でも石塔の研究はまだまだ進んでおらず、文献も少ないのですが、定林寺の石塔は一つの基準となるものです。

それから、ちょっとおもしろい資料ですが、定林寺跡では陶俑という小さな土のお人形が出土しています【スライド25】。破片は数センチくらいのものでほとんどですが、中国・北魏の永寧寺に類例があります。一般的に朝鮮半島と中国の位置関係から考えると、百済は中国の南の方のいわゆる華南、南朝と関係が深いと言われるのですが、この資料を見ますと、どうもそのように単純ではなくて、百済は中国の北朝とも南朝とも交流していたと考えられます。その一つの考古学的な物証だと言われているものがこの陶俑です。



定林寺陶俑
(北魏永寧寺に類例)

【スライド25】「定林寺出土の陶俑」

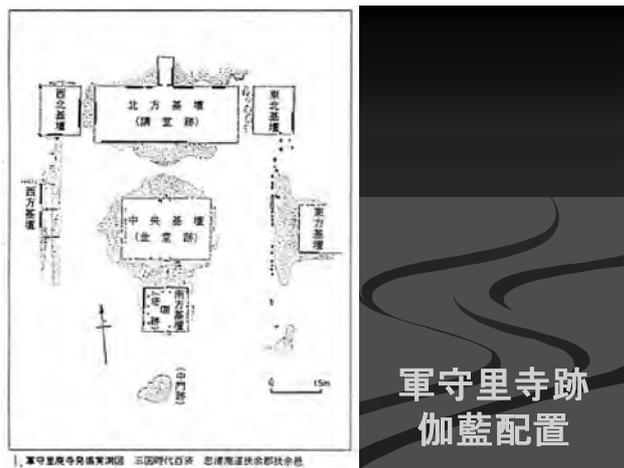
次は軍守里寺跡で、寺跡は松林の中にあります【スライド26】。これも数年前に再発掘をされまして、いろいろわかってきたのですが、この伽藍配置の図【スライド27】は以前の古いものです。塔・金堂・講堂が直線的に並んでいて一塔式の日本の四天王式と同じ伽藍配置と考えられていました。しかし、



[軍守里寺跡]
一塔式伽藍配置、瓦積基壇

南より

【スライド26】「軍守里寺跡」



軍守里寺跡
伽藍配置

【スライド27】「軍守里寺跡の伽藍配置」

金堂の左右にそれぞれ建物基壇があるので、これをもって一塔三金堂形式の飛鳥寺とも関係があるのではないかともし言われていたのですが、軍守里寺跡の場合は金堂と左右の建物基壇の位置が微妙にずれているのです。それから、もう一つ大事なものは、金

堂の左右にある建物基壇は回廊の外に位置しておりまして、これはやはり意味があるのだろうなと思われております。そういう点でも一塔三金堂形式と言えるかどうかというのは、ちょっとこれもまだよくわからないところです。ほかにこのお寺さんに関しては、寺町廃寺（三次市）とも共通点があるといわれる瓦積基壇【スライド28】があります。軍守里寺跡の場合は瓦を合掌形に積んだ少し特異な形をしていますが、瓦積基壇を採用する朝鮮半島では数少ないお寺さんです。

そしてこの軍守里寺跡の軒瓦は、寺町廃寺（三次市）の瓦と関係するのではないかとされているものです。ちょっと細長い蓮弁の素弁蓮華文軒丸瓦と重弧文の軒平瓦が出ています【スライド29】。重弧文の軒平瓦は日本にもあるのですが、ちょっと違う点は、下の方を指で押さえたような痕跡がある重弧文軒平瓦だということです。時

期的には大体6世紀の後半代から7世紀にかけてのものだと思います。そのほかに特徴的なものとして、箱形の文様埴が出ております【スライド30】。これは今のコンクリートブロックみたいな形のものですが、側面に蓮の花びらを表現したものと、旋回



瓦積基壇

【スライド28】「軍守里寺跡の瓦積基壇」



素弁蓮華文軒丸瓦・指押さえ重弧文軒平瓦

【スライド29】「素弁蓮華文軒丸瓦・指押さえ重弧文軒平瓦」



箱形文様埴

【スライド30】「箱形文様埴」

文と言いますけれどもこのような卍字のような文様を並べたデザイン磚です。これは日本の飛鳥古宮遺跡でもブロック状のものではなく、文様も違いますが、蓮華文と何かを並べた同じような配置のものが出ていまして、両者関係があるのではないかと考えられています。軍守里寺跡では、このような仏様も出土しています【スライド31】。これは非常に小さなものですが、右側のものは銅製で高さ11.5センチ、左側は滑石（ロウ石）製で高さ13.5センチです。



【スライド31】「軍守里寺跡の仏像」

【陵山里寺跡】

- ・羅城のすぐ外、陵山里古墳群西
- ・塔心礎上から舍利龕「百済昌王十三季太歳在丁亥妹兄公主供養舍利」
- ・昌王(威徳王)13(567)年、父聖王のために造営
- ・北西部で金銅製龍鳳文大香炉
- ・多量の瓦、金銅製光背片、鍍金製品、金銅製鈴、風招、ガラス玉、玉板、塑像仏、緑釉陶器など
- ・伽藍北西部は工房。ガラス製品、金銅製品などを生産

【スライド32】「陵山里寺跡」

次に陵山里寺跡です【スライド32】。このお寺は今から10年ぐらい前に発掘されていていろんなことがわかってきました。伽藍配置を復元するとこういう形【スライド33】になり、日本の四天王寺式に似ています。陵山里寺跡は、先ほど出てきました高句麗の定陵寺と同じように陵山里寺跡、陵の寺という名称になっておりますが、このお寺の横



【スライド33】「陵山里寺跡の伽藍復元」

(左・西側)には羅城、つまり城壁があって、右・東側には陵山里古墳群という王陵群があるのです。つまり、王たちの魂を鎮めると言いますか、そのような意味合いで造られたお寺と考えられます。また塔から見つかった舍利龕には、昌王13年という百

済の昌王の時代の年号が刻まれています【スライド34】。西暦567年にあたります。つまりこれによって塔がこのころにつくられたということがわかりました。舍利龕というものは、舎利の容器の外箱のようなものでして、これは花崗岩をくり抜いて作られたものです。中に舎利容器をいれていたと思いますが、発掘された時には中は空でした。といいますのは、百済が唐・新羅の連合軍に負けたときに、唐の軍隊がどうもこの王陵群を盗掘したようで、その時に持ち去られたのだろと言われております。



【スライド34】「昌王13 (567) 年石造舍利龕」

次の金銅製の龍鳳文の大香炉【スライド35】は、発掘されてすぐに韓国の国宝になりました。大変立派なものです。下の方に龍が、上に鳳凰が載っていて、その間のつぼみ状の形をしたところは神仙世界をあらわした山（蓬萊山）になっています。この山には仙人や神獣が表現されており、とてもすばらしい工芸品です。これは百済ではなく中国の南朝あたりで造られたものではないとも言われております。



【スライド35】「金銅製龍鳳文大香炉」

これは金銅仏の光背の破片です【スライド36】が、こうしたものが出てくるとい



【スライド36】「陵山里寺跡出土の金属製品」

ことは、単なる破片ではなくて、お寺の中に鑄造工房があり、こうした破片を鑄潰して改めて鑄造品をつくっていたのではないかと推定する人もいます。画面の左下は風鐸というお寺さんなどの屋根の四隅に下げられているものの風を受ける部分、風招（ふうしょう）というものです。この形のものは日本の飛鳥地域でも出てきております。

それからこれは、ちょっと意図的に入れたのですが、実は煙突です【スライド37】。興味深いことは先端にこのような飾りがつけられていることです。このような例



【スライド37】「陵山里寺跡出土の煙突」



【スライド38】「陵山里寺跡出土の軒丸瓦」

は高句麗にもありまして、今のところ、百済と高句麗ぐらいでしか出てきていません。実は日本列島でも、このような飾りはありませんが、円筒形の土製品が出土しています。そして山陰系の大型甑形土器につきまして、最近では渡来系の遺物で、百済系の煙突と関わりがあるのではと関西の若手の研究者の方が推論されています。先ほど、講演前に楽屋で話していたのですが、広島県内で実際に山陰系甑形土器と言っているものが、炉跡の上でつぶれた状況で、出ているという事例もありますので、確かにそのような可能性もあるかなと思われまして、そのような考えが証明されますと、また面白い展開になるのではないかと思います。

それから陵山里寺跡から出土した軒丸瓦は、百済の代表的な瓦です【スライド38】。

大体6世紀後半を中心に7世紀代のものまであります。高句麗の瓦に比べて、大変シンプルで優しい感じがするというようなことがよく言われます。

次は、王興寺跡です【スライド39】。このお寺は、扶蘇山城の北側にある錦江の北側に建てられたお寺で、すぐ近くまで川の水が来ていたと考えられていましたが、発掘調査でそれが確認されました。このスライドのこの部分が錦江（白村江）につながる部分で、お寺の前まで船が入って来ることができるようになっていました。伽藍配置は、ここも一塔形式ですが、ただ塔の両側の回廊に接して建物があり、この建物のあり方から先ほどの陵山里寺跡などとおなじように一塔三金堂形式との関連を考える方もおられます。お寺の建てられた年代は、後で年号が出てきますが、西暦577年ということです。

それから、ここの軒丸瓦などは飛鳥寺とよく似たものが見つかっています

【スライド40】。そしてこれまで飛鳥寺の垂木先瓦は、類例がなくちょっと浮いていたのですが、王興寺のものは確かに近いかなと思います【スライド41】。飛鳥寺のものは中房の周りに圈線があり、花卉の中央に稜線が入っていますが、このような例は

【王興寺跡】(国立扶余博物館2008)



【スライド39】「王興寺跡（復元模型）」



王興寺跡の瓦(国立扶余博物館2008)

【スライド40】「王興寺跡の軒丸瓦」



12.2cm

王興寺跡(左)と飛鳥寺跡(右)の垂木先瓦

【スライド41】「王興寺跡(左)と飛鳥寺跡(右)の垂木先瓦」

ほとんどありません。しかし王興寺のものには中房の周りに圈線があり、花卉の中央に稜線があります。類例は百済の金剛寺跡にもあるにはあるのですが、今度、王興寺でこの瓦が出ましたので、これはおもしろそうだなと思ってちょっと出しています。

それから、ここでも立派な舍利容器出土しているのですが、文字が書かれていたのです【スライド42～44】。3重になっていまして、最も外側の容器は青銅製で、次の容器が銀製、そして最も中の容器は金製です。そして一番外側の青銅製容器の外面に年号と文字が書いてありました【スライド44】。

丁酉という年号は西暦577年で、百済王の昌が亡き王子のために作ったことがわかるものです。基本的に百済のお寺は、王家や王族、その周辺の人たちが関わっている場合が多く、先ほどの陵山里寺跡もそうですが、こうした百済の王族の仕事が、いわゆる『三国史記』

などの書物だけではなくて、このような金石文でもわかるということは、本当にすばらしいことです。



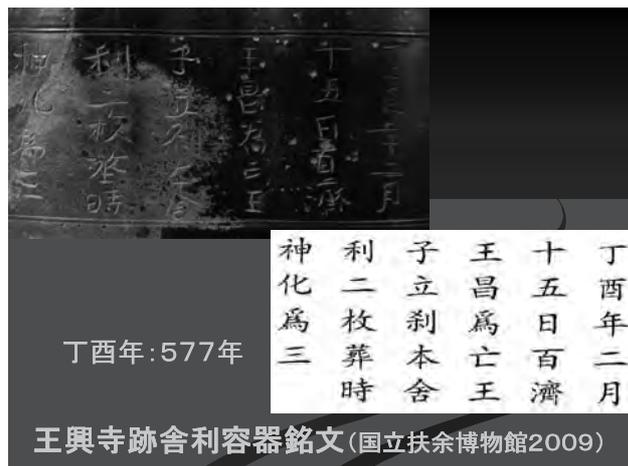
王興寺跡の舍利容器(国立扶余博物館2009)

【スライド42】「王興寺跡の舍利容器」



王興寺跡の舍利容器(右高さ10.3cm)
(国立扶余博物館2009)

【スライド43】「王興寺跡の舍利容器」



丁酉年:577年

丁酉年二月	十五日百濟	王昌爲亡王	子立刹本舍	利二枚葬時	神化爲三
-------	-------	-------	-------	-------	------

王興寺跡舍利容器銘文(国立扶余博物館2009)

【スライド44】「王興寺跡の舍利容器銘文」

それから、もう1カ所、弥勒寺です。これも『三国遺事』などに出てくるお寺さんで、百済の武王という王様がつくったと言われているものです【スライド45】。伽藍配置は、まず中門があって、塔があって、金堂があって、講堂がある。

その両側にも同じ配置のものが三つ並んであるというすごいお寺なのですが、このような形に復元されています【スライド46】。これをご覧ください

ただいたらおわかりいただけると思いますが、両側は石の塔です。真ん中は木造の九層の塔です。先ほど言

いましたように、日本の百済大寺とそれから新羅の皇龍寺などとはほぼ同じ時期のもので、それらに何らかの

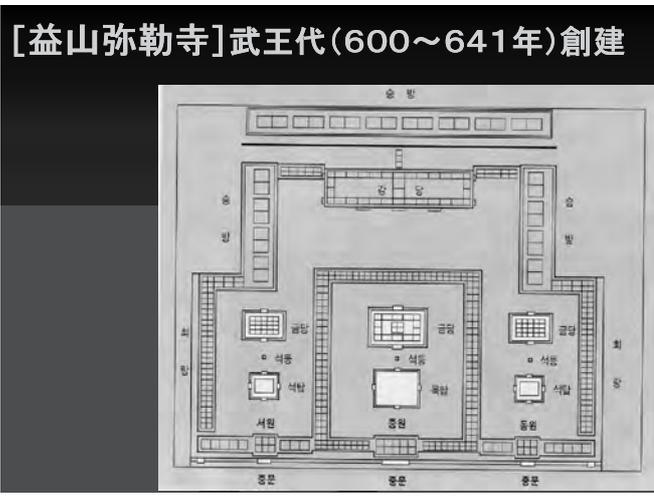
関わりがあるといわれています。三つある塔は、両側に石の塔、真中が

木造の塔があったのですが【スライド47】、石の塔は、17年ぐらい前

ですか、東の塔が復元修復されています。これ【スライド48】が復元された東の塔です。ちょっと見にくいの

ですが、白い部分は新たに復元に使用された花崗岩です。そしてこの少し

黒く見えるものが発掘で出てきたものを中にはめ込んで復元した部分



【スライド45】「益山弥勒寺（武王代（600～641年）創建）」



【スライド46】「弥勒寺跡の伽藍復元」



【スライド47】「弥勒寺跡の東西石塔」

です。とても大きい石の塔です。西の塔【スライド49】は、現在解体修理中で、写真は修理前のものです。これもとても大きいのですが、修理前は中に空間（通路）がありまして通れました。戦前、日本が支配していたときにいろいろ修繕等をしたのですが、うまくいなくて、このようになっていたのを、近年、韓国が根本的に修理をしようとしています。修理が完成したらどうなるかわかりませんが、修理前は石塔の中に入ることができました。入り口から入ったところに塔の心柱があり、石でつくられていました【スライド50】。心柱の石の下から一つ目の石の上に舍利を埋納していた穴が発見され、すばらしい舍利荘嚴具が発見されました。また石塔の外側に石造物が置かれています【スライド51】。これはお気づきの方も多いかと思いますが、飛鳥の猿石に似ていると思います。花崗岩を加工して、このような



【スライド48】「弥勒寺跡の復元東塔」



【スライド49】「弥勒寺跡の西塔」



【スライド50】「弥勒寺跡の西塔内部」

石造物をつくることは、この地域は好きなようでして、現在も花崗岩の石造物を作っている石屋さんがあります。しかも全部花崗岩でとても固い石材ですので、そういう

意味で興味深い資料です。

それから、先ほどの百済の軒丸瓦の文様はシンプルだと言いましたが、実は、百済の瓦も7世紀に入ってくるとちょっと周縁部に文様がついたりして装飾的になります

【スライド52】。画面右側の垂木先瓦の場合は、花卉に忍冬文が飾られ、釉をかけた緑釉瓦に仕上げられています。この瓦の中房の周囲をよく見ますとギザギザが付けられています。これは薬

(しべ)を表現したものと考えられていますが、百済にもあることがこれでわかります。この薬に関しましては新羅の瓦によく見られますので、新羅特有のものと考えられていますが、この弥勒寺の垂木先瓦の方が古いと思われるので、新羅の薬表現は百済から伝えられたのではないかと考えています。

このような百済瓦における変化が見られるようになるお寺の一つがこの弥勒寺なのです。それから、このお寺では壁画【スライド53】も出土しています。

それから弥勒寺跡では、ガラス製品を製作した坩堝なども出ています【スライド54】。日本では、飛鳥に飛鳥池遺跡という金属やガラスの工房遺跡があります。遺跡は飛鳥寺の南東にある



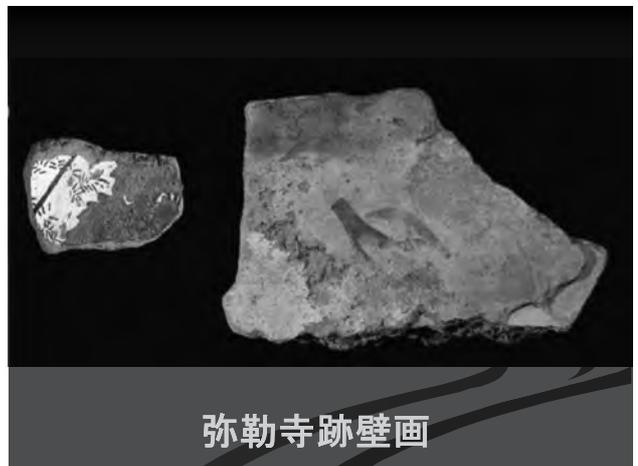
西塔南東隅石造物

【スライド51】「弥勒寺跡の西塔南東隅の石造物」



弥勒寺跡出土瓦

【スライド52】「弥勒寺跡の出土瓦」



弥勒寺跡壁画

【スライド53】「弥勒寺跡の壁画（左）、右は扶蘇山麁寺の壁画」

のですが、飛鳥寺に関係するだけでなく、国家的な工房跡と言われています。そこから弥勒寺跡から出たものと同じ砲弾形の坩堝などが出ていまして、そのモデルとなったものが弥勒寺跡などのものではないかと言われています。弥勒寺跡では、坩堝で溶かしたガラスをいろいろなものに加工したり、板状にして壁に張ったりしているのではないかという話もあります。

百済の瓦を簡単にまとめますと、先ほども言いましたように、文様が大変シンプルだと言うことです。そして瓦当面に卍字のような特殊な文様を飾る瓦以外は、だいたい日本に入ってきています。この卍字文様の瓦の時期は恐らく7世紀代に入ると思います【スライド55】。一方、先ほどから百済瓦はシンプルだとしきりに言っていますが、このような複雑な文様埴もありません【スライド56】。これも7世紀代のものですが、これらは有光教一先生が戦

前に窺岩面外里遺跡というところで発掘された資料です。とても素晴らしいもので見学したときにはすごく感動しました。文様自体、非常に洗練されています。忍冬文も入っています【スライド56の上段右端】。さらに、【スライド56の下段中央】のものは、



弥勒寺跡ガラス生産関連遺物

【スライド54】「弥勒寺跡のガラス生産関連遺物」



いろいろな百済瓦

【スライド55】「いろいろな百済瓦」



窺岩面外里遺跡文様埴(7世紀前半)

【スライド56】「窺岩面外里遺跡の文様埴(7世紀前半)」

山が表現されていて、そこにお坊さんが立ってしまして、山のお堂まで表現されています。大変細かいところまで表現された磚（レンガ）もあるということをご紹介しておきます。では続いて日本のお話に移ります。

3 飛鳥の古代寺院と瓦

日本では飛鳥地域に百済などの影響を受けて、最初の寺院がつくられます。先ほど言いました飛鳥寺です【スライド57】。ここに塔があつて、後ろに金堂があつて、塔の左右にも金堂があります。回廊の外、西側には池や庭園が推測されています。こうした建物の配置につきましては、百済の影響だけでは理解できないので、高句麗の影響もあったのでは…という話が出るわけですが、百済からやってきた工人たちが、お寺をつくったとちゃんと『日本書紀』には書いてあります。

そして、御本尊をつくった人は、渡来系の人物で、鞍作鳥という人物です【スライド58】。この人物は、司馬氏といって、一応、中国系の名前がついていますが、基本的には百済系の人々だと文献を研究されている方々はおっしゃっています。日本の記録の中では最初に、私的に仏教を信仰したといわれている人物が522年に渡来したといわれる司馬達止という人です。鞍作鳥はそのお孫さんにあたります。名前が鞍作（くらつくり）ですから、もともとは馬に関する



【スライド57】「飛鳥の古代寺院と瓦（飛鳥寺復元図）」



【スライド58】「飛鳥寺大仏（鞍作鳥作）」

道具（馬具）をつくっていた渡来系の人で、「おまえ、こういうのができるやろう…」
 ということで、どうも呼び出されて造ったのではないかと考えています。止利仏師と
 いわれている人物です。

飛鳥寺の創建時の瓦に関しましては、百済系と言われています【スライド59】。百
 済のものと比べてみたのが次の拓本の画面です【スライド60】。画面の上にあるのが
 百済の瓦，下が飛鳥寺のものです。多少違いはありますが，よく似ています。百済か
 ら来た瓦博士がつくったと『日本書紀』には書いてありますので，ほぼその通りでい
 いのだろうと思います。ただし，画面上の百済の軒丸瓦の蓮華文の花弁の数は8弁で
 す。皆さん，8という数字は円を半分に折って，また半分に折って，さらに半分に折

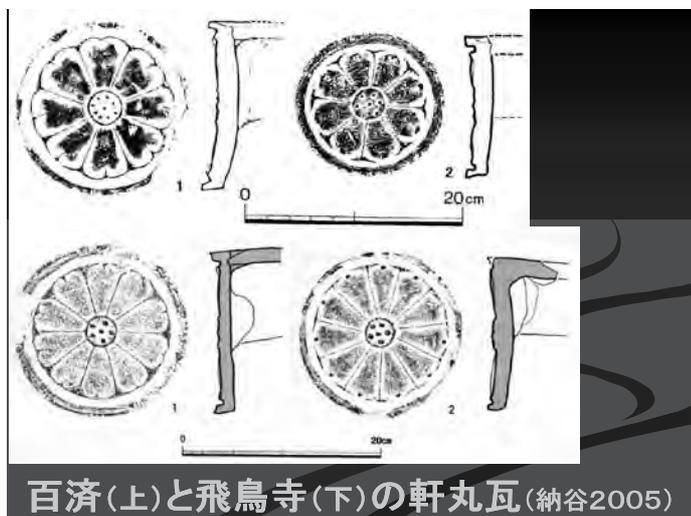
れば8等分できますで，簡単なの
 ですが，画面下の飛鳥寺の瓦は花
 弁の数は10か11でちょっと違うわ
 けです。これもよく冗談で言って
 いるのですが，飛鳥寺を造らせたの
 は，蘇我馬子という当時の最高権
 力者です。この人が百済の瓦その

ままは嫌だから，ちょっと飛鳥寺
 では花弁の数を変えよと言ったの
 ではないかなどと，ちょっと冗談
 のようなこともあったのではない
 かと思ったりしています。この前
 （平成23年12月），早稲田大学で
 お話をする機会がありまして，同
 じような話をしましたら大橋一章
 という美術史の大先生が「それは



飛鳥寺の創建瓦

【スライド59】「飛鳥寺の創建瓦」



百済(上)と飛鳥寺(下)の軒丸瓦(納谷2005)

【スライド60】「百済(上)と飛鳥寺(下)の軒丸瓦」

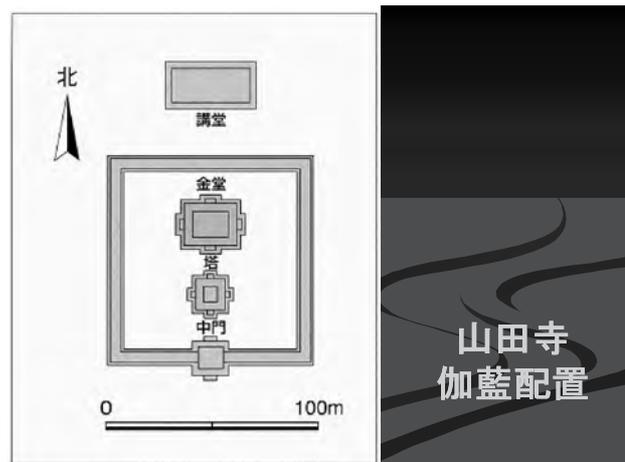
あり得るよね」とおっしゃいまして、本当に冗談みたいな話なのですが、あり得る話かもしれません。百済の瓦の花弁数は、例外的に9弁もありますが、基本的にほとんど8弁です。飛鳥寺の創建には、百済の工人たちが関わったと『日本書紀』に書いてあるのですが、百済の技術や文化が日本に入ってくるときに、そのままのものが来るのかどうかは問題です。受け入れ側として、意図的に何か少しでも変化させることがあったかもしれません。あるいは逆に、百済の工人が倭のような島国にお寺をつくるのに百済本国とそっくりにはつくってやらないと気負ったのかもしれません。当然これは冗談ですが、このように朝鮮半島の文化がそのままの形では日本列島に入ってきていないことが多々あります。これはかなり大事なネタだと思っています。

次は山田寺です【スライド61】。画面は発掘された金堂ですが、塔が前にある一塔式の伽藍配置です。山田寺は641年に蘇我倉山田石川麻呂さんが建て始めたものです。【スライド62】のような伽藍配置になっており、瓦は山田寺式という瓦です【スライド63】。使用状況を復元したものが【スライド



山田寺：641年蘇我倉山田石川麻呂創建

【スライド61】「山田寺跡（641年蘇我倉山田石川麻呂創建）」



【スライド62】「山田寺の伽藍配置」



山田寺式軒瓦（奈良文化財研究所2002）

【スライド63】「山田寺の式軒瓦」

64】です。この重弧文と言っています軒平瓦に関しては、どうも中国系の可能性が高そうです。奈良県の橿原考古学研究所の菅谷文則という方が、中国留学中に現地で同じようなものを採集されています。ですから、恐らく中国系で、朝鮮半島系ではありません。

山田寺の一つの特徴は、塼仏と言いまして、今のタイルに近いものがたくさん出ています【スライド65】。こうしたタイルを壁面に貼りつけています。画面右側は、復元されたものですが、このように金箔貼りのタイルを貼りつけて、キンキラキンに壁になるようにしていたようです。そして藤原道長が平安時代の書物の中で、山田寺の壁はすごかったと書いてありますように、それほど有名なものだったようです。

次は川原寺という飛鳥にあるお寺さんです【スライド66】。このお寺は天智天皇の御代、662年から667年ごろに勅願で建てられ始めたと言われているお寺です。これも伽藍配置が特異でして、東に塔、西に金堂、北にも金堂があるという、一塔二金堂形式の配置をしています【スラ



山田寺軒先復元(奈良文化財研究所2002)

【スライド64】「山田寺の軒先復元」



山田寺の塼仏

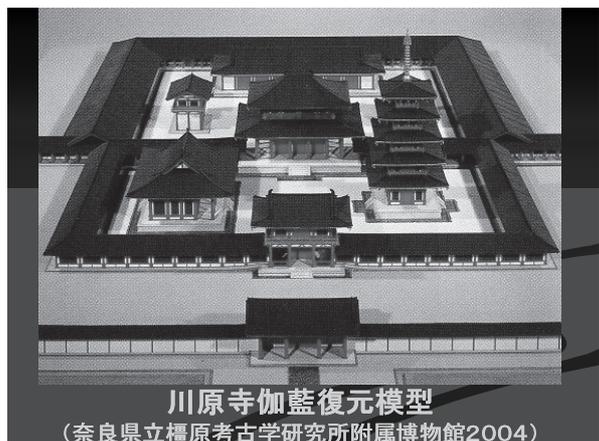
(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2004)

【スライド65】「山田寺の塼仏」



川原寺:天智元~6(662~667)年、勅願により造営?

【スライド66】「川原寺跡」



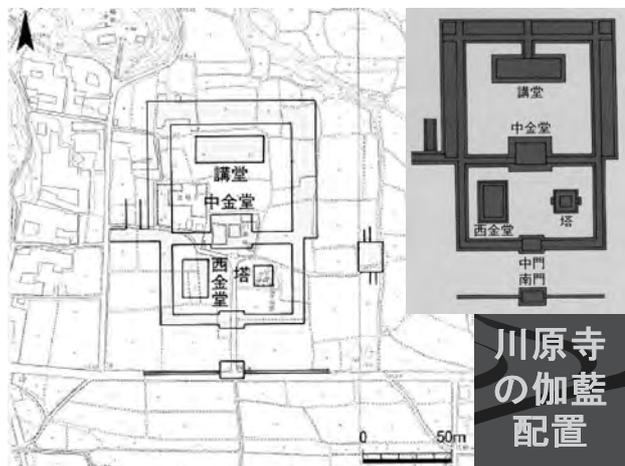
川原寺伽藍復元模型

(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2004)

【スライド67】「川原寺の伽藍復元模型」

イド67・68】。これは細かな話ですが、お寺に入るには基本的に南の門から入ります。しかし、このお寺は南の門より東の門の方が大きいのです【スライド68】。それはなぜか言うと、これは以前から言われていますが、東側に大きな道があったので、そのようになったとのこと。当時の飛鳥の都城を考えるとときに大事なお寺です。

瓦は川原寺式といわれるもので、これに関しましては、中国の唐との関係が考えられています【スライド69】。また、新羅との関係もあるのではないかという意見もありますが、よくわかりません。ただ、それまでの日本列島にはなかった形式の瓦です。これは博仏です【スライド70】。これはちょっと大きなもので、高さ20センチくらいです。先ほどの山田寺のものは小型のものがたくさんありましたが、川原寺のものはやや大き目のものです。これに関しましては、研究がかなり進んでいまして、中国にそっくりさんがあることがわかっています。中国のものも7世紀の前半から後半ころのもので、たくさん出ています。その中にそっくりさんがいますので、これらも中国系のものでいいと思います。つまりこ



【スライド68】「川原寺の伽藍配置」



川原寺式軒瓦 (奈良文化財研究所2002)

【スライド69】「川原寺式軒瓦」



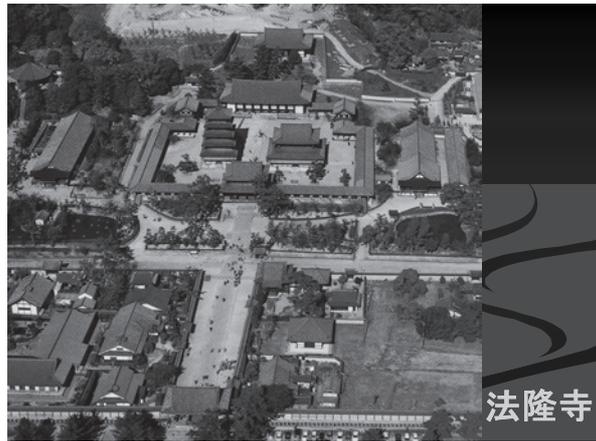
川原寺の博仏

(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2004)

【スライド70】「川原寺の博仏」

の段階になってくると、ぼちぼち中国系のものが増えてくるという特徴があります。

次は法隆寺です【スライド71・72】。これも皆さん、よく御存じだと思いますが、西に塔があつて、東に金堂があつて、その中央南側に中門があつて、塔・金堂を取り囲んで回廊があつて、そして後ろに講堂があります。ただ、これも御存じかと思いますが、現在の建物は670年に焼けた後に再建されたもので、7世紀初め頃の創建当初のものは現在のお寺の南東部にあつた若草伽藍というところにありました。伽藍配置は、寺町廃寺などとは、塔と金堂の位置が逆転した法隆寺式と呼ばれるものです【スライド73】。再建された西院伽藍より以前の創建当初の若草伽藍は、塔と金堂が南北に並ぶ一塔式のもので【スライド74】。金堂に安置された釈迦三尊像【スライド75】は、飛鳥寺の大仏をつくった鞍作鳥の作とされています。



【スライド71】「法隆寺」

法隆寺の建立

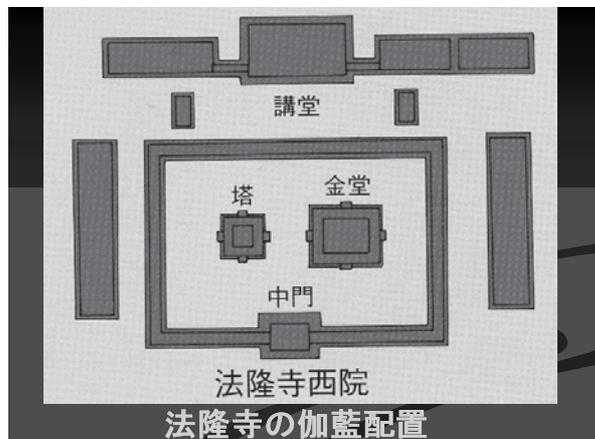
[斑鳩寺] (若草伽藍)

- ・記録では、聖徳太子が607年創建
- ・考古学的には610年頃に金堂創建
- ・630年頃塔創建
- ・670年焼失(『日本書紀』)

[法隆寺西院伽藍]

- ・670年頃金堂再建開始→690年頃には竣工
- ・塔・中門:711年頃完成
- ・講堂・経蔵・僧坊:天平年間完成

【スライド72】「法隆寺の建立」



【スライド73】「法隆寺の伽藍配置」



【スライド74】「法隆寺・若草伽藍」

それから瓦は、創建時の若草伽藍のものに関しましては、飛鳥寺の瓦が変化したものです【スライド76】。これらに関しましてはいろいろな研究がありますが、ちょっと特異なのは、軒平瓦の忍冬文が型作りではなく手彫りで製作されている点です。それから、現在の法隆寺である西院伽藍の670年ごろの瓦は、法隆寺式と呼ばれる複弁の軒丸瓦が特徴で、この系列の瓦は備後にも入ってきています【スライド77】。軒丸瓦・軒平瓦ともに、明らかに文様が変わってきています。

次は薬師寺です【スライド78】。薬師寺は現在奈良にあります【スライド79】が、藤原京の時代に造られた当初は藤原京内にありました。これは天武天皇が奥さんの持統天皇の病氣平癒を願って建てたお寺です【スライド80】。創建当初の薬師寺は塔が2基ありまして、新羅と関係があるのではないかととも言われています。現地に行きますと、塔の基壇や礎石が残っています。薬師寺は、都が藤原京から平城京に移るとお寺も一緒に移転しています。移転後の薬師寺を平城薬師寺、移転前の薬師寺を本薬師寺と呼びますが、



法隆寺金堂
釈迦三尊像
(623年、鞍作鳥作)

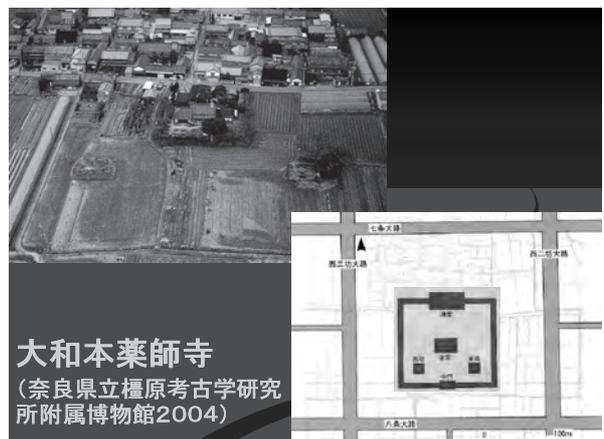
【スライド75】「法隆寺金堂の釈迦三尊像」



法隆寺若草伽藍の飛鳥時代瓦(610年頃)
【スライド76】「法隆寺若草伽藍の飛鳥時代瓦(610年頃)」



法隆寺西院金堂の法隆寺式軒瓦(670年頃)
【スライド77】「法隆寺西院金堂の法隆寺式軒瓦(670年頃)」



大和本薬師寺
(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2004)

【スライド78】「大和本薬師寺」

平城薬師寺には東の塔が残っています。
 そのほかはほとんど復元再建されたもの
 ですが、伽藍配置は二塔式の配置になっ
 ています【スライド79】。薬師寺の瓦で
 すが、法隆寺式と同じように7世紀半ば
 以降になって見られるようになる新しい
 様式の代表例の一つであります【スライ
 ド81】。薬師寺の瓦と類似した瓦も一部、
 備後の方に藤原京の時代に入ってきてお
 ります。

それから、これが御本尊の薬師寺如来
 像です【スライド82】。大きさは丈六仏
 と言いまして、立ったら一丈六尺=4.8
 メートル、この像は座っていますので2.4
 メートルぐらいです。

4 吉備の古代寺院と瓦

(1) 寺院造営以前の吉備と朝鮮半島

では、こうした中央での寺院建立の動
 きの中で、地方寺院の様相はどうなのか
 ということを見てみたいと思います【ス
 ライド83】。吉備では620年から630年ご
 ろに、備中の秦原廃寺が吉備のお寺さん
 としては最古クラスの寺院として建立さ
 れています。秦氏系の氏族による寺院建
 立と考えられ、山背の秦氏との関係も深



平城薬師寺の双塔式伽藍

【スライド79】「平城薬師寺の双塔式伽藍」

薬師寺の建立

[本薬師寺]

- ・680年、天武天皇が皇后(のちの持統天皇)の病氣平癒のために発願
- ・698年完成
- ・薬師寺式伽藍配置: 双塔式伽藍配置

[平城薬師寺]

- ・710年の平城宮遷都に伴い、奈良へ移る

【スライド80】「薬師寺の建立」



本薬師寺 金堂の軒瓦 (軒瓦瓦0121Aと軒平瓦6647G)

備 東塔の軒瓦 (軒瓦瓦0276Aと軒平瓦0647H)

本薬師寺金堂(左)・東塔(右)の瓦 (奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2004)

【スライド81】「本薬師寺金堂(左)・東塔(右)の瓦」



大和薬師寺釈迦如来像(丈六像: 高さ約2・4m)

【スライド82】「大和薬師寺の釈迦如来像」

かったと思われます。7世紀の中ごろになりますと、徐々に造営が始まっていきまして、安芸の横見廃寺であるとか、岡山県の賞田廃寺、箭田廃寺、香川県の開法寺、それから、愛媛県の来住廃寺などができてきます。7世紀の中ごろの大化の改新、これはなかったかあったかと、いろいろ論争がありますが、最近は何らかの政治的な動きはあったという意見が強くなっておりまして、このときにお寺さんをつくりましょうという動きが大きくなるようですので、そういうことが反映されているのかもわかりません。

その後は663年の白村江の戦いの後に、徐々に増えていきます。三次市の寺町廃寺もその頃のもので、その背景には白村江の戦いにおける敗北、そして命からがらの帰国という契機が考えられます。

その後、685年には天武天皇による寺院造営の奨励、つまり「諸国の家ごとに仏舎をつくり、仏像及び経典を置いて礼拝供養をせしめよ」という詔勅が出されて、それ以降どっと増えるというふうに言われています。

さて、これから吉備の古代寺院と瓦についてお話しをしようと思われていますが、備前・備中・美作、これらの地域が現在の岡山県側で、広島側の備後を含めて吉備と総称されています【スライド84】。美作はちょっと置いておきまして、今回は、備前・備中・備後のお話

* 地方での寺院造営のはじまり

- ・620～630年ごろの備中秦原廃寺が最古クラス
 - ・7世紀中ごろに少しずつ造営がはじまる。
 - ・安芸横見廃寺、備前賞田廃寺、備中箭田廃寺
 - ・讃岐開法寺跡、伊予法安寺跡・来住廃寺など
 - ・663年の白村江の戦い以後さらに少しずつ増加
 - ・備後寺町廃寺→白村江の戦いに参戦した備後三谿郡の大領の祖先が建てた「三谷寺」。百濟僧闕与
 - ・685年、天武天皇による寺院造営奨励
- 「諸国の家ごとに仏舎を造り、仏像および経典を置いて礼拝供養せしめる詔」

【スライド83】「地方での寺院造営のはじまり」

4. 吉備の古代寺院と瓦



【スライド84】「吉備の位置と範囲」

をします。

さて、岡山の場合、西暦400年頃に造山古墳という、全国でも第4位の大きさの古墳が造られます【スライド85】。

最近、測量して全長が350メートルだ、360メートルだという意見がありますけれども、その

横に榊山古墳という古墳があります。この古墳では朝鮮半島系の資料が出ています。

そしてついこの間、新聞でも報道されましたが、榊山古墳に隣接する千足古墳の石室内の九州とかかわる直弧文という文様が入った板石の表面が剥がれ落ちたので、保存対策

のために取り出したというのがこの千足古墳です。ここは九州の肥後、熊本あたりとも関わりが深いということです。

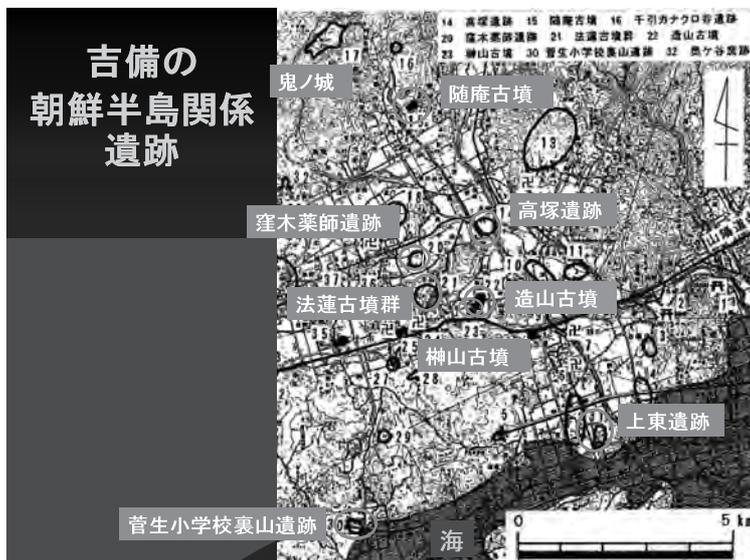
この造山古墳の周辺には、朝鮮半島、それから九州などに関係の深い遺跡が点在しておりまして、5世紀の前半ごろの吉備の中心地である備中の特徴だと思えます【スライド86】。これらの位置関係を見ますと、地図の下端あたりの網目の部分が当時は海になっていまして、その海岸線に近い上東遺跡は弥生時代からの大きな集落だったようです。発掘の成果などから集落の様子を復元してみますと、上東遺跡のあたりには港があったのではないかと推定されています。そこから内陸部にはいって

(1) 寺院造営以前の吉備と朝鮮半島

[備中造山古墳周辺]



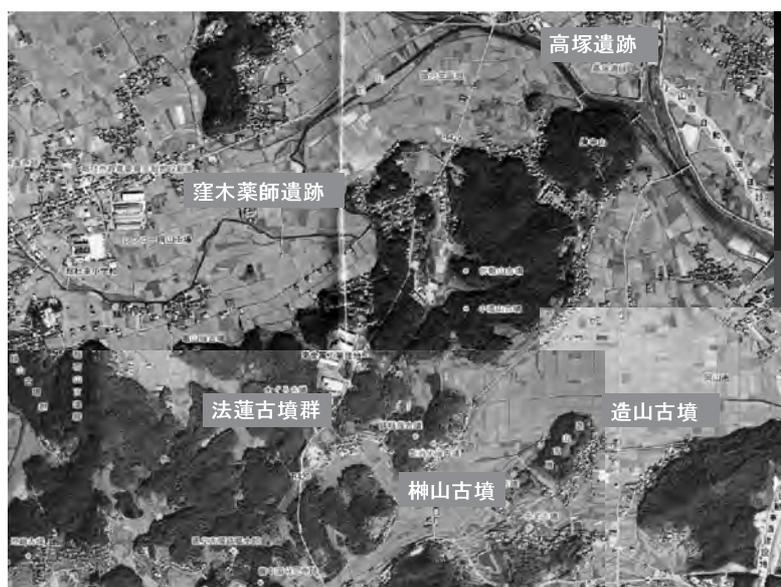
【スライド85】「備中造山古墳」



【スライド86】「吉備中枢部の朝鮮半島関係遺跡」

くと造山古墳があり、平野の北には鬼ノ城という朝鮮式山城があります。備後の茨城・常城などの話も出ましたが、この鬼ノ城は文献には登場していません。その麓には随庵古墳という5世紀の新しい鍛冶具をワンセット持っている、渡来系の鍛冶技術者の墓である可能性が推測される古墳があります。この地図に示しています場所はこのような渡来系の人たちが集まっていたと考えられるエリアになります。お話を少し詳しくしたいと思います。

航空写真で見ますと、造山古墳の周辺に、渡来系の遺物を出土した窪木薬師遺跡や高塚遺跡などが点在していることがわかります【スライド87】。高塚遺跡といいますが、弥生時代後期の貨泉が25枚出土し、銅鐸が出土したことで有名なのですが、一方で5世紀の渡来系遺物をたくさん出土した集落としても有名です。それから、窪木薬師遺跡というのは5世紀の前半に集落が再び大きくなり始めるのですが、鉄滓や砥石などが朝鮮半島系の土器などと一緒に出土していますので、朝鮮半島から来た渡来人の鍛冶屋さんの工房ではないかと考えています。それからその南側の法蓮古墳群でも朝鮮半島系の土器が出土していますので、造山古墳を中心として、生活空間の高塚遺跡、仕事場の窪木薬師遺跡、そしてお墓としての法蓮古墳群が位置しているのではないかと考えています。あと出てきます栢寺廃寺は窪木薬師遺跡の西側のちょっと向こう側です。それから、これも後で出ますが、窪木遺跡という窪木薬師遺跡の近くの遺跡で渡来系の三又鍬が見つかっております。



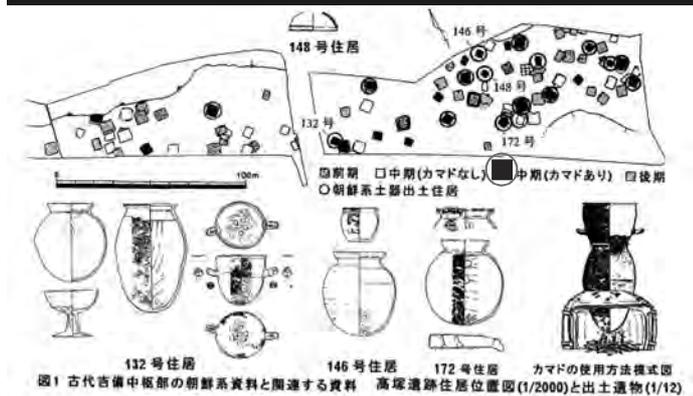
【スライド87】「吉備の中心地総社付近の遺跡（空中写真）」

これが高塚遺跡の竪穴住居の分布図です【スライド88】。図の右側にたくさんあります黒く塗りつぶして丸で囲んでいるものが、カマドのある竪穴住居です。これらはほとんどが5世紀前半のものです。かなりたくさん集中している様子がわかります。先ほど、伊藤さんのお話しにもありましたように、恐らく渡来人たちが入ってきて、1世、2世、そういう人たちが住んでいたのだらうと思っています。カマドは5世紀前半ごろには、まだまだ日本人は受け入れていませんので、このように集中的に見つかるのは渡来系の人たちが住んだ証拠だらうと思っています。高塚遺跡の132号住居跡のカマドは5世紀前半としていますが、5世紀前半でも古いほうだと思っています【スライド89】。住居跡の隅にカマドが造られています。画面の右下はそのアップです。

カマドの近くでつぶれている甕は、明らかに朝鮮半島からの持込品であろうと言われています。ほかの土器類は岡山で作られたものです。つまり、甕だけは朝鮮半島から持ってきて結構長く壊れずに使えたのだけれども、ほかのものはどうも早目に壊れてしまって、だんだん日本化していったのだらうというふうに考えています。

これが高塚遺跡の渡来人がいたと思われる住居から見つかった土器のセットです【スライド90】。先ほど申し上げた朝鮮半島からの持ち込み品と考えられています甕は、後列左から2番目のものです。

岡山県高塚遺跡住居分布図 (3~7世紀)



【スライド88】「岡山県高塚遺跡住居分布図 (3~7世紀)」



【スライド89】「岡山県高塚遺跡132号住居とカマド (5世紀前半)」

そのほかの土器でも日本列島の土師器と同じように作っているのですが、細かなところにまだ韓国的な要素が見られるものがあります。たとえば、細かな話なのですが、甑の把手の中央に溝が彫られているかどうかということです。こうした細工は日本の土師器の伝統にはなく、朝鮮半島の甑などの把手に特有の細工ですから、こうしたものが出土することで、渡来人たちが日本に来て行った細工だと考えられます。

窪木薬師遺跡は、鍛冶関係の遺物が多く出土しています。5世紀前半から7世紀、特に7世紀になると大規模な工房に変化していくようです【スライド91】。どうもこれは屯倉（みやけ）が設置されることと関係があるのでは、と僕は思っています。

さて、窪木薬師遺跡では5世紀前半のカマド付の住居が出てきます。その中に、渡来系の土器も出てきます。一方で、5世紀後半になりますとムラの規模が一時的に少し小さくなり、そして6世紀半ば近くになりますと、鍛冶屋さんの工房が拡大して発展していったことがわかります。

これ【スライド92】は窪木薬師遺跡の5世紀前半の鍛冶を行っていた工房

高塚遺跡132号住居出土土器(5世紀)(岡山県立博物館2006)



【スライド90】「高塚遺跡132号住居出土の土器（5世紀）」

岡山県窪木薬師遺跡の鉄器生産

- ・5世紀前半～7世紀前半の鍛冶遺跡
- ・13号住居(5世紀前半、カマド住居)から吉備産初期須恵器、軟質系土器、加耶系鉄鏃・鉄鋌、鉄滓
- ・6世紀中葉から鉄器生産工房が増加



【スライド91】「岡山県窪木薬師遺跡の鉄器生産」

岡山県窪木薬師遺跡13号住居(5世紀前半)



【スライド92】「岡山県窪木薬師遺跡13号住居（5世紀前半）」

とみられる13号住居です。カマドがあつて、周辺から土器が見つっています。カマドからは鉄素材の鉄鋌が見つかりました。ほかにフイゴの羽口や砥石、鉄をつくったときにできる滓（鉄滓）などもあります。住居が工房専用なのか、工房兼住居なのか、これはわかりませんが、ひとまず工房として使っているのは確かだと思います【スライド93】。13号住居から見つかった土器などを見ていきますと、日本的なものと渡来系のものがあります。それから鉄の鋳（やじり）の形が韓国の釜山にある福泉洞古墳群から見つかったものに似ています【スライド94】。つまり伽耶地域のものとよく似ているということです。

ところで話が戻りますが、造山古墳の横に榊山古墳があります【スライド95】。この古墳から出土した有名な渡来系の遺物に馬形帯鉤があります【スライド96】。画面の左側にあるものが榊山古墳の馬形帯鉤という馬の形をしたベルトのバックルです。ベルトに付けた円い環に馬形にデザインされた鉤を引っ掛ける大陸で使われた馬形のベルト金具です。日本では



【スライド93】「窪木薬師遺跡鉄器生産関連資料（5～7世紀）」



【スライド94】「窪木薬師遺跡13号住居の遺物（5世紀）」



【スライド95】「榊山古墳（造山古墳の陪塚）」



【スライド96】「榊山古墳（5世紀前半）と朝鮮半島の馬形帯鉤」

ここでしか出土していなかったのですが、10年ぐらい前になりますか、長野県で見つかりましたので、今のところ、全国で2カ所だけで見つかっています。基本的には百済・伽耶地域からの渡来品と考えられます。画面の右にありますものは、韓国の天安の清堂洞遺跡の

随庵古墳(5世紀前半)

- 約40mの前方後円墳
- 竪穴式石室内に鍔使用割竹形木棺
- 鍛冶具、ヤスリ、砥石
- 横矧板衝角付冑、三角板鋌留短甲
- 木心鉄張輪鍔



【スライド97】「随庵古墳(5世紀前半)の石室」

ものです。これは大体3世紀ぐらいのもので、榊山古墳のほうは4世紀の終わりから5世紀初め頃のものでいいと思います。

それから、5世紀前半の随庵古墳【スライド97】からは、新型の鍛冶具がセットで出ております。古墳の石室は、竪穴式石室です。僕が岡山に来ましたのは30年ぐらい前ですが、当時は普通の古墳だと思っていました。しかし、いろいろ調べておりましたら、鍛冶具が入っていたので、これは渡来系かなと思い始めました。しかし、実はこの中にもっと重要な渡来系の古墳である証拠がありました。それは石室に納めた木棺をとめるのに鍔(かすがい)を使っていたことです。釘・鍔の鍔です。「子は鍔」などともいいます。最近、授業で「鍔」という言葉を使いますと、学生はほとんど知りません。この鍔、実は、日本では4世紀ころまでは使われておりません。例外として兵庫県の豊岡市にある弥生時代終わり頃の立石遺跡の墳墓の中から、鍔が出ています。これ以外はありませぬ。次に出てくるのは5世紀に入ってからです。つまり釘や鍔は5世紀までの日本の古墳では使っていなかったのです。随庵古墳ではそれを使っていますので、このことに関しましては、5世紀前半でもちょっと新しくなるのかなと思いますが、いずれにしても日本でも最古段階の釘・鍔の使用例になります。ただ、この木棺は割竹形木棺で、一般的に日本列島の木棺です。しかし20年近く前くらいから韓国でも弥生時代段階の割竹形木棺が見つかっておりまして、割竹形木棺、イコー

ル日本古来の棺形式だとは言いきれなくなってきました。つまり、随庵古墳の割竹形木棺も朝鮮半島との関係が無視できないのです。そして随庵古墳の鍛冶具のセット

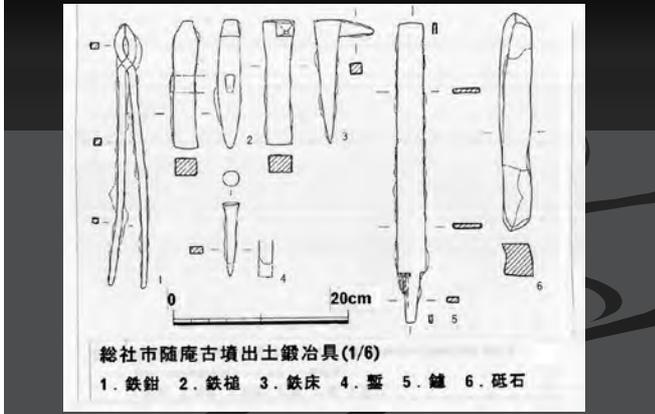
の中には、ヤスリが含まれています【スライド98-5】。ヤスリと一緒に含まれることはあまりありません。そういう点でも、渡来系の人を持ち込んだものの可能性が高いと思います。

次に、法蓮古墳群ですが、ここにありますように、高さの低い墳丘の古墳です【スライド99】。高さ1メートルあるかないかくらいです。その

ような古墳から家形埴輪がぽつんと出土したということで、とても注目されました。考古学をされている方はよく御存じですが、家形埴輪というものはそれなりに良い古墳から出土すると僕は思っていたので、このような小規模な古墳から出土して驚きました。そこで出土品を見てもみると、少し変わった土師器と須恵器が出土していました【スライド100】。画面の左上は、通常の須恵器ですが、右下は土師器の高杯の形をした須恵器です。図面で示すと

【スライド101】のようになります

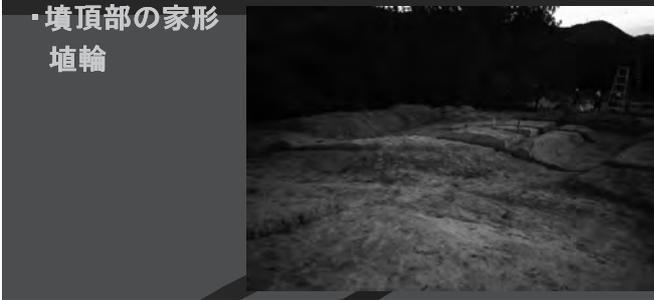
随庵古墳の鍛冶道具セット(5世紀前半)



【スライド98】「随庵古墳の鍛冶道具セット(5世紀前半)」

法蓮古墳群

- ・ 法蓮37号墳
- ・ 一辺8mの方墳、5世紀前半、木棺直葬
- ・ 土師器形態の須恵器、陶質土器形態の土師器
- ・ 墳頂部の家形埴輪

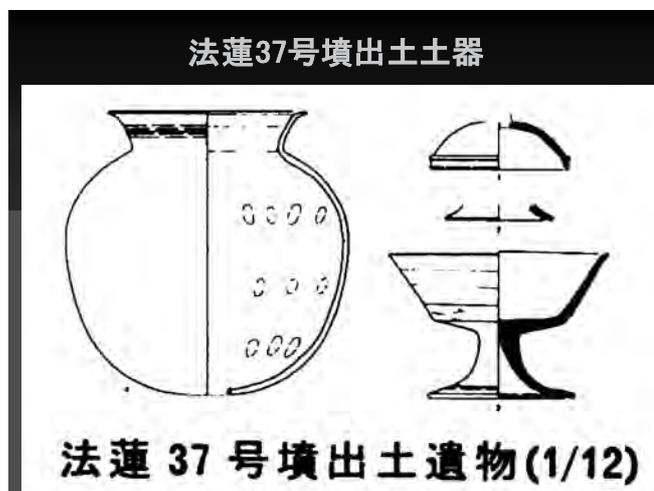


【スライド99】「法蓮古墳群」



【スライド100】「法蓮37号墳出土の吉備産須恵器」

が、この図の左側の土器は韓国の陶質土器の口縁部のような形をしています。土師質に焼かれていまして赤茶系の色をしています。日本の土師器の形の須恵器を焼いたり、韓国の陶質土器の形の土師器を焼くという、ちょっと変わった土器が法蓮古墳群からは出ています。こうした形と焼きの交錯した逆転現象なども、土器の製作に渡来人たちが関わった可能性が高いのではないかと思います。



【スライド101】「法蓮37号墳出土の土器」

それから、こうした土器を焼いた窯跡も発見されております。総社市の奥ヶ谷窯跡です【スライド102】。

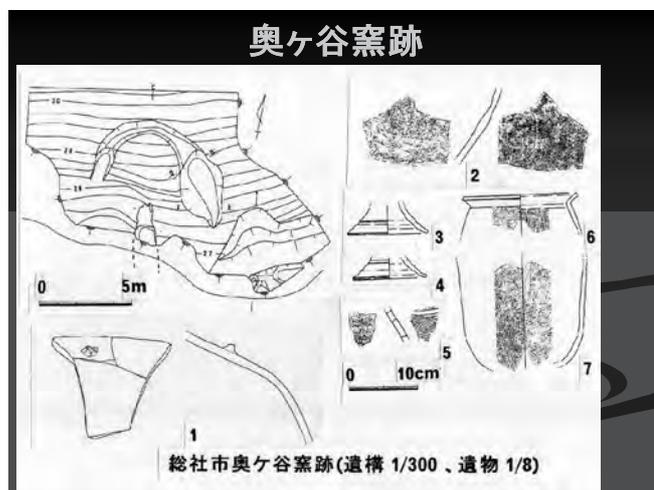
時期は、恐らく5世紀の前半ごろです。窯跡の残りが悪くて、全体の4分の1以下ぐらいしか残っていませんでした【スライド103】。窯跡から

出土した土器ですが、軟質系の土器も一緒に出ています。このようなあり方も実は特徴の一つです。韓国で

軟質土器と言っているものは、日本の土師器という赤茶系の土器にあたるのですが、軟質土器も窯で焼きます。ただし、焼くときに、今回は赤茶系で焼く、次は灰色系で焼く、というふうに焼き分けていたのだと思



【スライド102】「奥ヶ谷窯跡」



【スライド103】「奥ヶ谷窯跡と出土土器」

います。奥ヶ谷窯跡でもどうもそのように焼いていたようで、まさに渡来人たちが土器を焼いた窯のようです。出土した土器の中には、日本の土師器の器形をしたものも出てきております【スライド104・106】。

日本で須恵器がつくられ始めたときに、最初は大量に大甕を焼いています【スライド105】。それはなぜかという、こういう大甕は水を貯蔵する水甕として使ったと考えられています。当時の日本列島の人々の日常生活では、水を供給する井戸は住居1軒1軒にあるわけではありませ

んから、皆さんも御存じだと思いますが、水道がそれほど普及していなかったちょっと昔の家には水甕があつて、それに水を入れておいて、いろいろな用途に使っていたのです。須恵器が入ってくるまでの日本列島には赤茶系の土師器の甕しかありませんので、それに水を入れていたと思われる。そうしますと、たとえば現在の植木鉢と同じように時間がたちますと、じわーっとしみ出てなくなったのではないかと思います。そうしますと1日に何度も水汲みを



奥ヶ谷窯跡の遺物(岡山県立博物館2006)

【スライド104】「奥ヶ谷窯跡の遺物」



須恵器大甕

【スライド105】「須恵器大甕」



奥ヶ谷窯跡出土須恵器・土師器・軟質系土器甕

【スライド106】「奥ヶ谷窯跡出土須恵器・土師器・軟質系土器甕」

しなければなりませんので、大変な負担になります。須恵器は、それまでの赤茶系の土師器に比べれば、明らかに水が蒸発しにくいということで広く受け入れられたのではないかと僕は考えています。そのような観点から見ますと、遺跡からたくさんの須恵器の甕の破片が出てくるのも納得できると思います。

それから、この場所が古墳時代の港のあとと考えられている菅生小学校裏山遺跡です【スライド107】。この遺跡は港の本体と推定される部分

を発掘調査していませんので、未確認ですが、発掘しましたら古墳時代の港の跡が出てくるのではないかと考えています。この周辺から出土した土器の図面がこれです【スライド108】。一番左上の土器が、百済の南のほうの現在の全羅道のもので

それから、8番と9番の甕は朝鮮半島でも地域差がありまして、8番のように底が丸くなっていて細長い穴が開いているものが主に新羅や伽耶の東の方、つまり朝鮮半島の東南部あたりのものです。9番のように底が平らで、丸い穴が開いているのが全羅道から伽耶の西の方のものの特



【スライド107】「菅生小学校裏山遺跡（港湾？）（5世紀）」



- 1. 全羅道系
- 9. 全羅道・伽耶西部系
- 5. 百済系
- 3, 4, 8. 伽耶東部・新羅系

【スライド108】「菅生小学校裏山遺跡の出土遺物（5世紀）」



【スライド109】「菅生小学校裏山遺跡の出土新羅系甕」

徴です。8番のような甑は日本で見つかるのはかなり珍しく、穴の形などからも新羅系の甑といえることができます。これがその写真です【スライド109】。画面の右に新羅の古墳から出土した甑を写していますが、底部の放射状の穴などよく似ています。菅生小学校裏山

遺跡は港の遺跡としますので、渡来系のいろいろな人たちが船でやって来て、そして去っていくときにいろいろなものを置いていったのかなと思っています。そういう意味で、このような多様なものが出てくるのではないかと思います。今のところ、こうしたも

のは広島では出ていませんけど、福山のあたりでは意識して掘ると見つかる可能性はあるのではと、ちょっと期待しているところです。海辺の遺跡というものは、このような点ですごく大事なかなと思っています。

それから、格子目のタタキのある小型の平底の鉢にはススがついております【スライド110】。これで何かぐつぐつ煮たのだろーと思いましたが、ソルロンタンやカルピタンなどのような韓国料理を作っていたのではないかなと想像したくなります。当然空想の世界ですが。

それから、この遺跡からは日本産の須恵器や土師器も出ています。基本的に地元の岡山でつくられた土器です【スライド111】。次は、これが先ほど言いました窪木遺

菅生小学校裏山遺跡軟質系土器平底鉢



【スライド110】「菅生小学校裏山遺跡の軟質系土器平底鉢」

菅生小学校裏山遺跡 吉備産初期須恵器高杯



【スライド111】「菅生小学校裏山遺跡の吉備産初期須恵器高杯」

跡から見つかった渡来系の三又鍬です【スライド112】。この地域に関しましては、吉備の反乱というものが463年に起きたと言われていています。そして白猪の屯倉や児島の屯倉が設置されるわけですが、その屯倉の設置にからみまして、もともと吉備にいた渡来人たちに加えて新しい畿内経由の渡来人が入ってくるのかなと僕は思っています。先ほどの三又鍬はその段階にもたらされたものかもしれません。屯倉の話につきましては、あとでまたお話しします【スライド113】。

千引カナクロ谷遺跡は、現時点で確認されている製鉄遺跡の最初の段階の遺跡と言われているものです【スライド114】。この遺跡は先ほどの随庵古墳のすぐ近くにあります。この地域に関しましては、渡来人の記録が残ってまして、8世紀の前半、忍海漢部が備中国の賀夜郡庭瀬郷三宅里にいたと記録されています【スライド115】。そして三宅里の三宅は屯倉関係と考えられますので、白猪の屯倉や児島の屯倉の設置と関係が考えられます。忍海漢部といえますのは、大和（奈良県）でも有名な渡来系氏族に関わるグループ

窪木遺跡の三又鍬(6世紀)



【スライド112】「窪木遺跡の三又鍬（6世紀）」

* 吉備の乱(463)と白猪屯倉(555) ・ 児島屯倉(556)の設置

- ・ 窪木薬師遺跡の6世紀中葉からの鍛冶遺構の増加
- ・ 千引カナクロ谷遺跡の製鉄遺構(6世紀後半)

【スライド113】「吉備の乱と白猪・児島屯倉の設置」

千引カナクロ谷遺跡製鉄遺構(6世紀後半) (岡山県立博物館2006)



【スライド114】「千引カナクロ谷遺跡の製鉄遺構（6世紀後半）」

[文字史料に見える吉備の渡来人]

- ・ 正倉院文書「備中国大税負死亡人帳」(740年)
- ・ 忍海漢部: 賀夜郡庭瀬郷三宅里
鉄との関わり
- ・ 西漢人部: 賀夜郡阿蘇郷
千引カナクロ谷遺跡
- ・ 都宇郡、賀夜郡、窪屋郡における渡来人の比率
- ・ 都宇郡: $6/15=40\%$ 、賀夜郡: $7/33=21\%$ 、窪屋郡: $0/24=0\%$

【スライド115】「文字史料に見える吉備の渡来人」

ですが、在地の有力氏族の葛城氏と関わって活動しています。忍海漢部に関しましては、関晃（せきあきら）という文献の渡来人研究の大先生が既に、鉄に関わっていたことを書かれていますので、ちょうど話が合うかなと思います。

それから、忍海漢部の下に行に西漢人部が賀夜郡阿蘇郷にいたことが書いてありますが、ここは千引カナクロ谷遺跡があるところです。それから都宇郡、賀夜郡、窪屋郡といいますのはこの備中中枢部の地域ですが、都宇郡というのは、「津」、つまり港に関わる郡です。それから文献に記載された住民のうち渡来系の人の占める割合は、都宇郡は15人のうち6人で40%、賀夜郡は33人のうち7人で21%、そしておもしろい点は窪屋郡では0人となっていることです。この窪屋郡の場所は、備中国分寺などがあるところで、もともとの在地の人たちが住んでいたところかなと思っています。つまりこの地域の渡来人たちは、もともとの在地の人々が住んでいたところの周辺部に住んで、海運とか製塩とか、鉄生産などに関わっていたのではないかと推測しています。そして先ほどの千引カナクロ谷遺跡では、8世紀の前半まで鉄生産を行っています。この8世紀の前半という時期はまさに先ほどの正倉院文書の「備中国大税負死亡人帳」が作られた時期です。

仏教関係に関しましては、緑山17号古墳という備中国分寺のすぐ裏手の古墳がおもしろいです。時期は6世紀末から7世紀前半ですが、この古墳から蓮華文を象嵌で表

現した刀の装飾金具が見つかります【スライド116】。当時、蓮華文の意味するところは仏教思想ですから、そういうものを所持していた人は仏教と関わりがあった、あるいは仏教思想を理解していた人と考えてよいでしょう。こうしたものをどこでつくっていたのか



【スライド116】「総社市緑山17号墳の蓮華文象嵌大刀（6世紀末～7世紀前半）」

よくわかりませんが、このような蓮華文を飾った刀を古墳に納めているということは、仏教を理解できる人がいた可能性が大いにあるということでしょう。

(2) 吉備の古代寺院と瓦

次にお寺さんのお話です。寺町廃寺を含めて、今日のお話に関わる寺跡や遺跡を図上に大きく示しています【スライド117】。まず栢寺廃寺。このお寺さんは「かや」という名前を冠していまして、栢＝賀夜＝伽耶と通じ、まさに渡来系氏族の寺院の可能性があるといます。同様に秦原廃寺は秦氏と関わった可能性が推測されます。津寺遺跡は海や河川の港（津）に近く、渡来人が往来したことが推測される遺跡です。それから賞田廃寺は、上道臣という吉備の有力氏族がつくったお寺です。

ここにお示した【スライド118】には、吉備地域で使われた初期の畿内系の瓦を挙げています。飛鳥時代の瓦でして、上段の中央の2番の瓦が、先ほどの津寺遺跡から出ています。それから12番の瓦

(鬼板)は、復元したものですけれども、同じものが蘇我氏に関係する飛鳥の豊浦寺の横のほうで見つかってしまして、蘇我氏に関連するお寺さんに運ぶ瓦を生産した窯、末ノ奥窯跡で見つかっています。つまり吉備で作った瓦をわざわざ飛鳥まで運んでいると言われていきます。このような瓦の生産供給のあり方は、実は屯倉に関連がある



(2) 吉備の古代寺院と瓦

【スライド117】「寺町廃寺と吉備の古代寺院」



【スライド118】「吉備の飛鳥時代瓦」

のではないかと考えています。

これらの瓦の分布を示した図【スライド119】を見ますと、津寺遺跡は川が近くにありますので、この川を使って瓦を運び出したと言われているのですが、小さなお堂が建っていた可能性があるのではないかと考えています。この川の上流に栢寺廃寺があります。それから画面中央右寄りに日畑廃寺があります。このお寺につきましては、僕はほとんど意識していなかったのですが、亡くなられた葛原克人さんが、日畑の「畑」は「秦」に通じるのではないかとおっしゃっていました。確かに可能性は無視できませんね。この日畑廃寺につきましては後でまた触れますが、秦原廃寺と同じ範型の瓦を使っておりまして、両者は関係が深かったと思います。画面の上のあたりが賀夜郡で、中央下あたりが都宇郡で、左側が窪屋郡です。これらの郡を東西に貫いて古代山陽道が走っています。つまりちょうど東西の陸路と南北の河川交通が交わる交通の要衝です。そのなかに津寺遺跡

も位置しています。津寺という地名の「寺」という字には、お役所という意味があると言われています。まさに河川交通を取り仕切る津の寺、いわゆる川のお役所という意味があったのではと思います。吉備を代表する吉備津神社はこの画面の右側になりますが、吉備の中核部に位置していることになります。

秦原廃寺【スライド120】には、7世紀前半の少し珍しい瓦があります【スライド121】。これと多少似ているものが、山背の広隆寺の瓦です。珠文という丸い点の場所がちょっと違うのですが、雰囲気



【スライド119】「吉備の飛鳥時代瓦出土遺跡の分布」



【スライド120】「備中秦原廃寺」

は多少似ているかなと思います。それから秦原廃寺の7世紀後半の瓦もちょっと変わってしまっていて、軒平瓦の下面（顎面）のところですが、下から見上げると、波状の文様がついています【スライド122】。

これとは文様は少し違いますが、山城とか播磨にも類例がありますので、播磨を通して吉備に伝わったものだろうと僕は思っています。

それから賞田廃寺ですが、現在の岡山市にある備前の上道臣という大豪族のお寺さんです。ここの伽藍配置

はよく見ていただくとおわかりのように珍しいものになっています

【スライド123】。創建の時期は7世紀半ばごろと考えられますが、この

時期の建物跡は、どこにあったのか明確ではありません。図面に金堂と書いてあるものは、7世紀後半のもの

です。そのあとに8世紀の前半から後半にかけて、塔が2基つくられます。そのときになぜかわかりませんが、お寺の中軸線が西に大きく移動

しています。もしかしたら塔と塔の間に何かあってそこを避けたということも考えられますが、いずれにしてもよくわかりません。つまり吉備

は多少似ているかなと思います。それから秦原廃寺の7世紀後半の瓦もちょっと変わってしまっていて、軒平瓦の下面（顎面）のところですが、下から見上げると、波状の文様がついています【スライド122】。

これとは文様は少し違いますが、山城とか播磨にも類例がありますので、播磨を通して吉備に伝わったものだろうと僕は思っています。

それから賞田廃寺ですが、現在の岡山市にある備前の上道臣という大豪族のお寺さんです。ここの伽藍配置



【スライド121】「備中秦原廃寺と山背広隆寺の瓦（7世紀前半）」



【スライド122】「備中秦原廃寺の7世紀後半の瓦」



【スライド123】「賞田廃寺の伽藍配置」

の代表的氏族である上道臣がつくったお寺なのに、伽藍配置がはっきりしないのです。つまり、地方の寺院できちんとした伽藍廃寺を持つお寺をつくるのは、それはすごく大変なことだったということがわかります。地方の寺院で伽藍配置が整っているのは、かなり頑張っつくっているなと思っています。賞田廃寺の場合は、その後室町時代ぐらまで存続しています【スライド124】。



【スライド124】「備前賞田廃寺の軒丸瓦」

それから栢寺廃寺、これは今日のテーマに一番関わるわけですが、出土した瓦を一覧にしました【スライド125】。右上の3番は寺町廃寺の瓦です。1番、2番の瓦が創建のもので、7世紀中頃だと考えられています。そして7世紀後半になると文様が複雑化し、奈良時代に入りますと、平城系の瓦が出てきます【スライド126】。



【スライド125】「備中栢寺廃寺の瓦」

5 備後の古代寺院と瓦

(1) 備後寺町廃寺

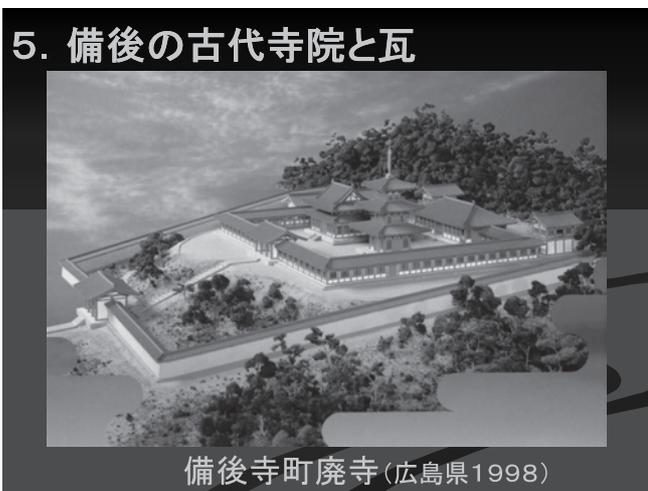
では、備後の古代寺院についてお話しします。備後の古代寺院を語る時、よく使わせてもらっているのですが、寺町廃寺のように伽藍配置



【スライド126】「備中栢寺廃寺の瓦」

がわかる例はとても珍しいと思っています。これが寺町廃寺の当時の様子を復元模型にしたものです【スライド127】。次の地図は、寺町廃寺と関わる備中の寺院を示したものです【スライド128】。この中で備中の大崎廃寺というお寺が備中で水切り瓦を出土した唯一の寺院です。寺町廃寺の創建時の瓦の范型が、栢寺廃寺から寺町廃寺にもっていかれるのに、寺町廃寺の最盛期の水切り瓦が今度は備中の大崎廃寺に影響を与えているという、双方向の交流がわかります。あとでもう少し突っ込んでお話しできればと思いますけれども、備中南部と備後北部は何かしら関わりが深そうな、そういう時代だったと思います。

さて、寺町廃寺【スライド129】については、『日本霊異記』の中にそのお話が出てきます。寺町廃寺を建てようと百済から来たお坊さんの弘濟さんが、都に行って、仏像の材料を買いに行くわけです。その帰り道で難波、現在の大阪のあたりで4匹の大きな亀を買って放してやった。そして船で帰る途中に、備前の骨島というところで、これも当時はよく



備後寺町廃寺(広島県1998)

【スライド127】「寺町廃寺の復元模型」



吉備の古代寺院の分布

【スライド128】「吉備の古代寺院の分布」

(1) 備後寺町(てらまち)廃寺

- ・『日本霊異記』(822年頃成立)の三谷寺と推測されている。
- ・663年の白村江の戦いにより日本・百済は唐・新羅連合軍に敗北
- ・白村江の戦いに参戦した備後三谿郡の大領の祖先が「三谷寺」を建立
これに百済僧が関与
- ・創建瓦は備中栢寺廃寺の范型が移動

【スライド129】「備後寺町廃寺」

あることだと思いますが、船頭さんが突然海賊にかわったということですね。海賊はお坊さんに荷物を船に置いて海に入れと言います。お坊さんが海に飛び込むと、足がたまたま岩の上に乗かって助かった。岩かと思ったものは、実は亀の背中だったという話です。その亀がたどりついたのは備中の海岸だったというお話になっていて、弘濟さんは、そこから無事に備後の寺町廃寺に帰ってくるという話になるわけです【スライド130】。このお話からわかりますことは、地方の豪族が白村江の戦いに参加したということ、これを一つの契機として地方に仏教が入ってくる、そういうような流れです。ここで重要な点は、白村江の戦いに参加した地方豪族が百濟などからお坊さんを連れて帰ってきた。7世紀の後半ごろの地方への仏教思想の広がりやお寺さんの造営に関して、信仰心とか、そういうものが当然ある一方で、あとでお話ししますが、経済的な要因もかなりあるということです。

また、地方のお寺をつくるにあたって、お坊さんが材料等の調達のために都に行ったことも重要です。つまりさすがに地元だけでいろいろな資材を賄うのはしんどいということです。それからお坊さんは都からの帰り道に備中に立ち寄っています。こういうお話と備後の寺町廃寺と備中の栢寺廃寺の関係が関わる可能性はあるのですが、これが偶然なのか、必然なのかはわかりません【スライド131】。

『日本霊異記』上巻第7「亀の命を買い取って放生し、現報を得て、亀に助けられる縁」

「三谿郡大領の祖先が663年の白村江の戦いに参戦し、もし、『無事に生きて帰ることができたらいろいろの神様のために伽藍を建てます』と誓願し、生きて帰ることができたので、一緒に連れて帰ってきた百濟禪師弘濟に三谷寺を建ててもらった」

「弘濟は仏像を造るために都に上り、金や絵の具などを買って帰る途中、難波津で4匹の大亀を買い、放してやった。そして舟を借りて帰ろうとしたが、備前骨(かばね)島あたりで舟人が賊にかわり、海に入れられたとき、難波津で助けた亀に助けられ、備中の海岸まで運んでもらった」

【スライド130】『日本霊異記』の三谷寺建立説話」

- ①日本列島の地方郡司層が白村江の戦いに参戦
- ②そこで悲慘さも含めいろいろと実感し、仏教に帰依し、寺院を建てようと考えた
- ③百濟のお坊さんを連れて帰ってきて寺を建てた

* 7世紀後半の地方における寺院造営の背景に、このような信仰心・精神的なもの関わっている
 * 百濟の僧はその資材を都に求めに行き、帰りに備中に立ち寄った。
 * この話と寺町廃寺創建瓦が備中と関わる話は偶然？

【スライド131】『日本霊異記』の三谷寺建立説話の要旨」

それで寺町廃寺の瓦【スライド132】ですが、栢寺廃寺のものとは比べてみますと、蓮華文の中房のところの蓮の実を表現したところに小さな傷がついています。蓮の実の

表現は真中に1つ、周囲に7つの点で表現されていますが、真中の点と周囲の点の間に一カ所だけ連結する棒のようなものがついているのです

【スライド133】。これは実は筈キズと言いまして、瓦の木型についたキズです。この筈キズは、木型の使用によってだんだん大きくなるのです

が、栢寺廃寺と寺町廃寺の筈キズによる棒を比べてみますと、栢寺廃寺のものの方が小さいです。ということは、栢寺廃寺で先に使われた瓦の木型が、その後寺町廃寺に持ってこ

られたと推定されるわけです【スライド134】。これは岡山県におられた岡本寛久さんが、以前論文で報告されています。以前僕もこれらの瓦を見まして、同じ見解を持ったのですが、僕のほうは結局、書かなくて、そのままになっていましたが、まさに

そういうことを岡本さんが論及されています。岡本さんは論文で、瓦の木型が栢寺廃寺から寺町廃寺に移っ

た



備後寺町廃寺の創建瓦
(7世紀中葉～後半)

【スライド132】「備後寺町廃寺の創建瓦（7世紀中葉～後半）」



寺町廃寺瓦(左)と同筈の栢寺廃寺瓦(右)
(同じ筈キズ:寺町廃寺大・栢寺廃寺小)

【スライド133】「寺町廃寺瓦(左)と同筈の栢寺廃寺瓦(右)」

【三谷寺】広島県三次市寺町廃寺が候補

- ・伽藍配置:法起寺式:大和法起寺などで使用
→畿内系?。畿内→吉備の寺院→寺町廃寺という可能性も
- ・基壇:瓦や埴を使用:百済に瓦積基壇→百済系?
- ・瓦:近畿地方との直接的な関係は不明
備中栢寺廃寺に同筈瓦。筈キズにより栢寺廃寺→寺町廃寺:備中との関係

* 栢寺廃寺も瓦積基壇、瓦を含め百済→備中→寺町廃寺という流れを想定しても良いかもしれない。

【スライド134】「伽藍配置や瓦などからみた三谷寺の系譜」

てきたということをおっしゃっているわけですが、これによって、寺町廃寺の瓦が、備中とつながると考えざるを得なくなったわけです。寺町廃寺の瓦はその後展開

して、独特の水切り瓦のデザインを完成し、周辺地域の寺院の瓦に大きな影響を与える存在になっています。

つまり、一つのアイデンティティとしてこの地域独自の瓦デザインが確立し、その後も継続していくのです【スライド135】。こうした動きの中

で、先ほども言いましたように大崎廃寺で水切り瓦がでておりまして、

備中南部地域にも影響が及んだことがわかるのです【スライド136】。

実は、この大崎廃寺に関して、亡くなった葛原さんがおっしゃっているのですが、大崎廃寺の水切り瓦以前の軒丸瓦は、よく似たものが山背の北野廃寺で出ています【スライド

137】。北野廃寺は山背の秦氏関係の寺院と考えられていますので、瓦の類似からは大崎廃寺も秦氏など渡来

系氏族が関係したお寺と考えることが可能です。そうしますと、大崎廃寺を含めて備後と備中には、渡来系氏族や寺町廃寺のように百濟僧が建

てきたということをおっしゃっているわけですが、これによって、寺町廃寺の瓦が、備中とつながると考えざるを得なくなったわけです。寺町廃寺の瓦はその後展開して、独特の水切り瓦のデザインを完成し、周辺地域の寺院の瓦に大きな影響を与える存在になっています。つまり、一つのアイデンティティとしてこの地域独自の瓦デザインが確立し、その後も継続していくのです【スライド135】。こうした動きの中で、先ほども言いましたように大崎廃寺で水切り瓦がでておりまして、備中南部地域にも影響が及んだことがわかるのです【スライド136】。実は、この大崎廃寺に関して、亡くなった葛原さんがおっしゃっているのですが、大崎廃寺の水切り瓦以前の軒丸瓦は、よく似たものが山背の北野廃寺で出ています【スライド137】。北野廃寺は山背の秦氏関係の寺院と考えられていますので、瓦の類似からは大崎廃寺も秦氏など渡来系氏族が関係したお寺と考えることが可能です。そうしますと、大崎廃寺を含めて備後と備中には、渡来系氏族や寺町廃寺のように百濟僧が建



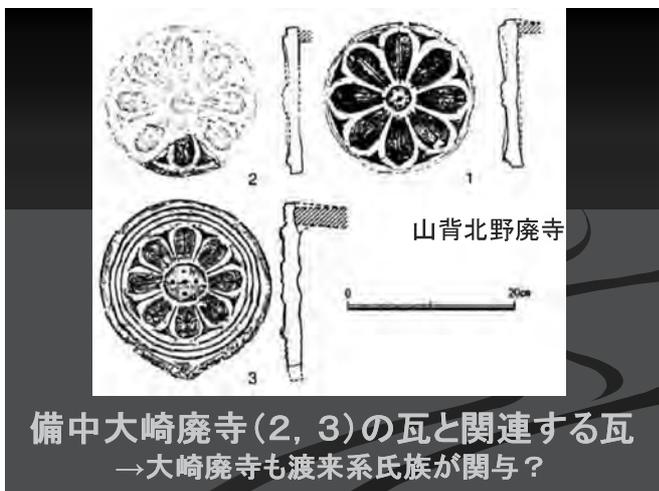
備後寺町廃寺(左)と上山手廃寺(右)の水切り瓦

【スライド135】「備後寺町廃寺(左)と上山手廃寺(右)の水切り瓦」



備後寺町廃寺と備中大崎廃寺の水切り瓦(左:寺町廃寺、右:大崎廃寺)

【スライド136】「備後寺町廃寺(左)と備中大崎廃寺(右)の水切り瓦」



備中大崎廃寺(2, 3)の瓦と関連する瓦
→大崎廃寺も渡来系氏族が関与?

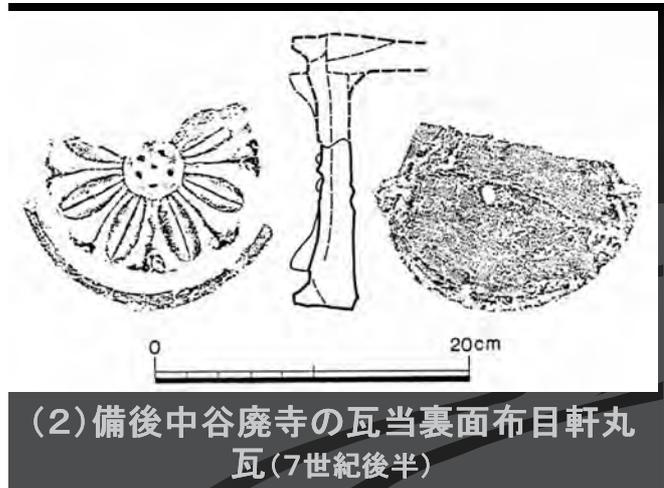
【スライド137】「備中大崎廃寺(2, 3)の瓦と関連する瓦」

立に絡んでいるお寺が多いこととなります。

(2) 備後中谷廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦

それから備後の中谷廃寺です。これについてはほとんどどなたもおっしゃっていない話ですが、実はとても珍しい瓦が出ています。瓦当面の裏側に布目がついているのです【スライド138・139】。このような瓦は、奈良時代にはかなり見られるのですが、この中谷廃寺の瓦は、奈良時代より古いと僕は思っています。年代的に古い瓦当裏面布目軒丸瓦は、今のところ、畿内の藤原宮の瓦の中にあります。そして、中谷廃寺の瓦はそれよりも古い可能性があると思っていますので、この中谷廃寺の瓦は、藤原宮を含む畿内から伝わったのではなくて、別グループで備後に伝わった可能性があると思っています。

【スライド140】は百済の瓦です。ただし、百済といいましても正確には百済と新羅の国境線近くの大田市の鶏足山城から出た瓦です。そして中谷廃寺の瓦と同じように瓦当面の裏側に布目がついています。年代は



(2)備後中谷廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦(7世紀後半)

【スライド138】「備後中谷廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦(7世紀後半)」



備後中谷廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦

【スライド139】「備後中谷廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦」



大韓民国大田広域市鶏足山城の瓦当裏面布目軒丸瓦(7世紀前半)

【スライド140】「大韓民国大田広域市鶏足山城の瓦当裏面布目軒丸瓦(7世紀前半)」

恐らく7世紀の前半ぐらいだと思っ
ていますが、こういうものをつな
がる可能性はあるのかなと思っ
ています【スライド141】。

次にもう1カ所、備中の日畑
廃寺ですが、先ほども少し触れ
ましたが、場所は有名な弥生時
代の楯築墳丘墓のある丘陵の横
にあります【スライド142】。こ
こで備後中谷廃寺と同様の瓦当
裏面布目軒丸瓦が見つかってい
ます【スライド143】。

図面の1番の瓦の瓦当面の裏
側に布目がついています。これ
は中谷廃寺と同じ独特の技法で
製作された瓦であることがわか
ります。それからもう一つ、こ
れはかなり意図的にあげたもの
で、今後の課題と思っています
のですが、これはレンガの類な
のです。塼とよばれるもので、
このレンガ状の塼の裏側に畳表
のような圧痕がついているので
す【スライド144】。画面の右
下のものは、以前から畳表の圧
痕がある塼として有名な備後
の本郷平廃寺の六角形の塼です
。備後は古くから畳表で有名
ですよね。そして古代の記録
の中には、山背の秦氏がこう
いうものの製作を得意として
いると書かれています。こ

備後中谷廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦

【瓦当裏面布目軒丸瓦】

- ・軒丸瓦の裏側(瓦当裏面)に布目がみられる
- ・現時点では大和藤原宮(7世紀末)の瓦が最も古い。
- ・中谷廃寺瓦の文様(7世紀後半?)は藤原宮瓦より古い?:藤原宮→中谷廃寺とは考えづらい。
- ・中谷廃寺瓦:もし畿内経由であるならば、畿内渡来系氏族の非主流派瓦
- ・朝鮮半島では大田鷄足山城例が技法面で近い。
- ・百済・新羅国境地域から備後の一寺院に技法が伝えられた可能性?

【スライド141】「備後中谷廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦」

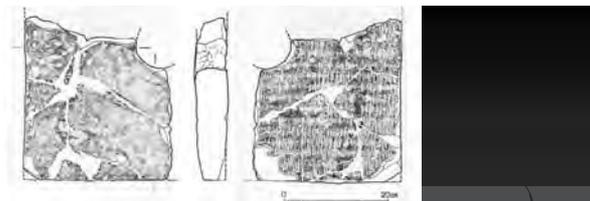


【スライド142】「備中日畑廃寺の位置と出土瓦」



備中日畑廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦と重弁蓮華文軒丸瓦[秦原廃寺瓦と同範](7世紀後半~末)

【スライド143】「備中日畑廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦と重弁蓮華文軒丸瓦」



備中日畑廃寺と備後本郷平廃寺の畳表状圧痕塼

【スライド144】「備中日畑廃寺と備後本郷平廃寺の畳表状圧痕塼」

これは可能性の話ですが、これらの畳表の磚は7世紀段階のもので、古代の記録をさかのぼる資料になるかもしれません。日畑廃寺と本郷平廃寺のものは形も違いますが、今後の検討材料になるかなと思ひまして紹介しておきます。

6 備中と備後の瓦が語るもの

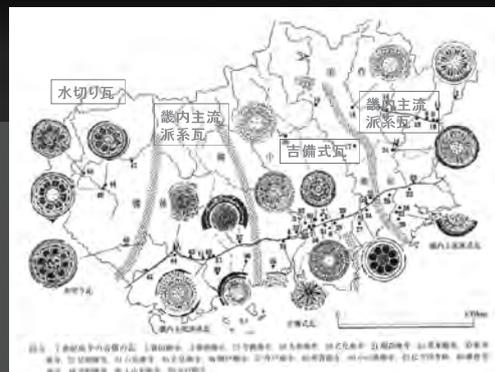
ではここで簡単なまとめをしておきます【スライド145～150】。吉備のお寺さんの全体の傾向を見てみますと、備後北部を中心に水切り瓦がたくさんありまして、備後の中部ぐらまで広がっています。備後の南部になりますと畿内の主流派の瓦が中心で藤原宮式なども入っています。岡山県の方にいきますと、東の方の備前には備後の南部と同じように畿内の主流派の瓦が入っています。そして吉備の真ん中、まさに備中中枢部には、吉備式といわれる独特のグループが入っています。吉備式は畿内の渡来系の人たちが使っていた瓦の可能性があるので、畿内系ではありますが、主流派とは別グループと考えています。大ざっぱに言いますとこのような傾向が見られると思っています。このような瓦の系譜を検討し

[備中と備後の瓦が語るもの]

- ①備中・備後の寺院・瓦に畿内中枢部(中央)と関わる瓦(畿内主流派瓦:奥山久米寺式、川原寺式、法隆寺式、藤原宮式など)
- ②備中・備後の寺院・瓦に畿内の渡来系氏族・寺院と関わる瓦(畿内非主流派瓦)
- ③備中・備後の寺院・瓦に朝鮮半島と直接的に関わる瓦
- ④備中栢寺廃寺→備後寺町廃寺の同範瓦
- ⑤備後の水切り瓦→備中大崎廃寺の水切り瓦
- ⑥備後中谷廃寺と備中日畑廃寺の瓦当裏面布目軒丸瓦
- ⑦備後本郷平廃寺と備中日畑廃寺の畳表状瓦痕

【スライド145】「備中と備後の瓦が語るもの」

吉備の7世紀後半の瓦



【スライド146】「吉備の7世紀後半の瓦」

* 備中・備後の瓦で何を語る事ができるか

- ・備中賀夜郡と備後三谿郡の豪族たちが関係?
- ・賀夜郡栢寺廃寺・賀夜郡大崎廃寺も渡来系氏族の寺院?、この氏族と百濟僧が関わる?
- ・栢寺廃寺の僧などと三谷寺の僧が関わる?
- ・都宇郡日畑廃寺と下道郡秦原廃寺に同範の重弁蓮華文軒丸瓦。日畑廃寺も渡来系氏族関係?
- * 寺院造営の技術的な面で、渡来人ネットワーク?
- * 技術面に僧も関与?
- * 仏教・寺院造営技術の伝播に地方→地方がある。

【スライド147】「備中・備後の瓦で何を語る事ができるか」

5. おわりに

- a. 高句麗・新羅・百濟の古代寺院と瓦の特徴
- b. 588年、大豪族蘇我馬子の飛鳥寺造営
- c. 7世紀前半～: 畿内における大王家・豪族たちの寺院造営→百濟大寺、山田寺、川原寺など
- d. 畿内における渡来系氏族の寺院造営
 - ・大和坂田寺: 司馬氏、鞍作氏
 - ・山背広隆寺: 秦氏
 - ・大和檜隈寺: 東漢氏
 -

【スライド148】「おわりに(1)」

ますと近畿地方と吉備の関係がわかるのではないかと思っています。そういう意味で、水切り瓦は畿内とは関係ない別のルートで入ってきたのではないかということです。

7 白村江の戦いと吉備, 備後の古代寺院

最後に、白村江の戦いの経緯と寺町廃寺をはじめとした渡来人と古代寺院の関わりについてお話しすることにします。

まず戦いに至る朝鮮半島の情勢【スライド151】に触れておきますと、百濟では義慈王という王様が641年に即位しました。20年間、在位するのですが、この人がかなり頑張って新羅を攻めます。伽耶

という地域を6世紀の後半に新羅が吸収合併してしまうのですが、それを奪おうとするわけです。これが640年代の話です。654年、新羅では金春秋が武烈王として即位します。この金春秋という人物は、王族なのですが、日本や中国に行き来した外交の達人です。その人が新羅の武烈王として即位します。655年、高句麗は百濟と連合して新羅を攻撃します。これに対して新羅は、唐に救援を求めます。659年には百濟がしきりに新羅を攻めるので、再び唐に救援を求めます。そこでついに唐が実際に朝鮮半島に乗り出してくるわけです。

660年3月に唐は新羅の要請にこたえて、蘇定方という人を総司令官として百濟に

e. 地方豪族たちの寺院造営

白村江の戦い以後、地方豪族たちの仏教信仰
中央から地方への仏教の伝播

→王権・大豪族の影響(畿内主流派瓦)による
寺院造営(山田寺式瓦、法隆寺式瓦など)

→渡来系氏族などの影響(畿内非主流派瓦)による
寺院造営(備中秦原廃寺?)

→685年、天武天皇による寺院造営奨励

→地方寺院の爆発的造営

【スライド149】「おわりに(2)」

* 吉備における古代寺院の造営

・在地豪族の造営: 賞田廃寺(上道氏)、三谷寺
・渡来系氏族の造営: 栢寺廃寺(賀夜氏?)、秦原
廃寺(吉備の秦氏系氏族?)

→畿内経由の寺院・瓦

→畿内経由でない瓦を使用する寺院

f. 朝鮮半島(中央・地方)→日本列島の地方へ直接
伝播(畿内に例がない朝鮮系瓦、瓦当裏面布目
軒丸瓦?)

・朝鮮半島から日本列島へ、いろいろなレベル、多様
なルートで瓦が伝播、受容

【スライド150】「おわりに(3)」

【白村江の戦い】(『三国史記』、『日本書紀』)

・義慈王(在位641~660年)は即位後、盛んに新羅を攻撃し、旧伽耶地域の多くを奪う。

・654年、金春秋が武烈王として即位。655年、高句麗は百濟と連合し、新羅を攻撃。新羅は唐に救援を要請。

・659年4月、百濟がしきりに国境を侵すので、唐に救援を要請。

・660年3月、唐は新羅の要請に応え、蘇定方を総司令官として百濟に出兵。7月9日、金庾信率いる新羅軍は黄山原の戦いで階伯率いる百濟軍を破り、蘇定方率いる唐軍と合流。7月12日、百濟の王都泗沘城を囲み、7月13日、義慈王は熊津城に逃げ、子の隆が降伏し、18日、義慈王は太子と熊津城から来て、降伏。百濟は滅亡。

【スライド151】「白村江の戦いに至る朝鮮半島情勢と倭国の動き(1)」

出兵します。当時の新羅には金庚信という伽耶の王族出身の将軍がいるのですが、その金庚信が率いる新羅軍が、その年の7月9日に黄山原の戦いで階伯率いる百濟軍を破って、蘇定方の率いる唐軍と合流して、7月12日には百濟の王都・泗泚城を囲みます。13日義慈王は北方の熊津城に逃げ、子の隆、この人は記録によっては太子だと書いてありますが、この人が降伏し、その後、18日には義慈王も太子とともに泗泚に戻ってきて降伏し、百濟は滅亡します。これが百濟滅亡の経緯です。

関係する場所を地図【スライド152】で示しますと、白村江は大体海辺のあたりだと言われています。そこから錦江をさかのぼって、州柔（周留）城、泗泚城、熊津城など百濟の主要な城がこの錦江沿いにあります。ここに唐の軍隊がやってきて、百濟は滅亡するのですが、そのときに百濟の宮廷の女性たち3000人が、追い詰められて泗泚城（扶蘇山城）の崖から身を投げて亡くなったといわれているところが扶蘇山城の北側にある落花岩です。その後、各地で百濟復興運動が起こって、王族の鬼室福信、それからお坊さんの道琛という人たちが、先ほどの州柔（周留）城で、日本に人質に行っていた百濟の皇子・豊璋を迎えて、復興運動を積極的に行うわけですが、それでかなり頑張るのですが、途中で内紛が起こって混乱しはじめます。そういう中で、日本では斉明天皇が661年に難波から船で出発し、途中の大伯海と書いていますが、これは現在の岡山県瀬戸内市、昔の邑久（おく）郡のあたりで、ここで大伯皇女（おおくのひめみこ）という人が生まれます。

皇女の名前に生まれた地名がついているのです。その後14日には伊予の熟田津（にぎたづ）、これは現在の松山市です。ここでは石湯行宮（いわゆのかりみや）に入っています。松山市ではその遺跡の候補地も見つかっています。そ



【スライド152】「白村江の戦いの関連地位置図」

して25日には海路で九州の娜大津（博多湾）に着くわけです。そこで磐瀬行宮に入って、その後、5月5日に朝倉橋広庭宮（あさくらのたちばなのひろにわのみや）に移り住むと『日本書紀』には記されています。しかし7月24日、斉明天皇はそこで亡くなるわけです。【スライド153】「白村江の戦いに至る朝鮮半島情勢と倭国の動き（2）」

- ・そのとき、残された多くの宮人たちは扶蘇山城の北の絶壁から白馬江（錦江）に身を投げたという。
- ・その直後から、各地で復興運動が起こり、王族鬼室福信は僧道琛とともに周留城で、日本にいた王子豊璋を迎え、旧百濟領をほぼ回復する。しかし、内紛が始まった。
- ・日本では、斉明天皇が、7(661)年1月6日、難波から船で西征に出発。8日、大伯海で大伯皇女が生まれた。14日、伊予熟田津(にぎたつ)の石湯行宮(いわゆのかりみや)に到着。3月25日、海路で娜大津に到着、磐瀬行宮(三宅?)に入る。5月9日、朝倉橋広庭宮に移り住む。そして、7月24日、斉明天皇は朝倉宮でなくなった。
- ・斉明天皇が百濟救援のために九州へ向かう途中、備中邇摩郷にて兵士2万人を集めた(『本朝文粹』2、「三善清行意見封事」の中の『備中国風土記』の記事)。

それを引き継ぐのが中大兄皇子（天智天皇）です。この斉明天皇が百濟救済のために九州に行く途中で備中国の邇摩郷で兵隊さん2万人を集めたということが記録に出てきます。この場所は現在の倉敷市に想定されていまして、「二万」という地名が残っています。この記録などから、斉明天皇は百濟救援に行く途中各地で、兵隊さんを集めたことが推測できるわけです【スライド153】。斉明天皇の航路を地図で示しますと、備中邇摩郷の近くには鬼ノ城、そして備前に大廻小廻山城があり、対岸の讃岐には屋島城と城山城、難波の近くには高安城が河内と大和の境にあります【スライド154】。

661年の8月に中大兄皇子が將軍阿曇比羅夫らを百濟救援につかわします。そのときに軍兵が約5,000人、船が170艘送られています。日本側の記録である『日本書紀』と朝鮮半島側の記録である『三国史記』などの記録で錯綜した部分はあると思いますが、おおよそ今お話したような状況です。

天智天皇は663年3月に將軍上毛野君稚子（かみつけののきみわかこ）たちを遣わしています。この將軍の名前からもおわりのよ



白村江の戦いと古代山城
 (奈良文化財研究所2002)
 【スライド154】「白村江の戦いと古代山城」

うに、上毛野国（かみつけののくに）、現在の群馬県のエリアにいた関東の豪族を將軍として2万7,000人も派遣しているのです。そして上毛野君稚子は、新羅を討伐しました。この派兵は、一方では百済を救援し、一方で新羅も討伐するという、つまり両面作戦なのですが、上毛野君稚子さんたちは新羅に勝ったようなのですが、百済では敗北してしまいます。先ほどお話ししましたように内紛があり、6月に豊璋が福信を切っています。663年の8月17日、新羅は州柔に入り、王城の州柔城を取り囲んで攻撃します。一方、熊津城から錦江を下ってきた劉仁軌の率いる唐軍は、軍船170艘で白村江に戦列を構えます。そして8月27日の初戦で日本が敗走しますが、次の日の28日には、「気象を見ずに」と書いてありますので、日本側の船がどうも風向きとか、海流とかを考えずに、むやみに攻撃したことで大敗してしまいます。この大敗でたくさんの方が溺れ死んで、『三国史記』には「海水が赤くなった」と書いてあります。9月7日に州柔城が降伏して、9月24日には百済の人たちが日本に亡命してくる、というのが一連の白村江の戦いの流れです【スライド155】。

その後、天智天皇の664年の5月に百済を平定した唐の將軍・劉仁願は、郭務棕らを遣わして、上表文を納めた函と献上物を日本に進上し、日本が唐に朝貢するようにと伝えています。12月に郭務棕は帰りますが、この年に対馬・壱岐、それから筑紫などに防人（さきもり）と烽（すすみ・とぶひ）を置いて、筑紫に大堤を築いて水を貯えます。これが水城です。

天智天皇の665年の2月に百済の男女400人あまりが近江の国にやってきます。そして近江の国の神前郡に住まわせて、田んぼを賜った。つまり生活ができるようにしたということです。

その後、655年8月に達率の答

・661年8月、中大兄皇子は將軍阿曇比羅夫らを百済救援に遣わした。9月、軍兵5000余人（軍船170艘？）を豊璋の護衛として百済の福信のもとに送った。
・天智天皇2（663）年3月、將軍上毛野君稚子らを遣わし、27000人を率いて、新羅を討たせた。6月、豊璋が福信を切る。
・663年8月17日、新羅軍は州柔にいたり、王城（州柔城・周留城）を囲む。熊津城から錦江を下ってきた劉仁軌ら唐軍は軍船170艘で白村江に戦列を構えた。
・8月27日、初戦で敗北、28日、気象をみずにむやみに攻め、大敗。多くのものが水に落ちて溺死し、船の舳先もめぐらすことができなかつた。9月7日、州柔城が降伏。9月24日、佐平余自信、達率憶禮福留や一般の人々は亓禮城（てれさし：全羅南道烏城？）に至り、25日、日本に向かった。

【スライド155】「白村江の戦いの経緯」

体春初（とうほんしゅんそ）という人を派遣して、長門の国に城を築かせます。これが下関にあったと考えられている長門城です。それから、達率の憶禮福留と四比福夫を筑紫の国、つまり現在の福岡県の方に派遣して、大野城と椽城を築かせたという記録があります【スライド156】。

このように白村江の戦いの後に、日本側も様々な対応をしています。そして、寺町廃寺（備後三谷寺）のような例は、備後の三谷郡だけの話ではなくて、伊予の越智郡の大領の祖先の話にも出てきます。彼も百済を救うために派遣されたのですが、唐の捕虜になって中国に連れていかれます。そこで観音菩薩像を信仰して、松の木で船をつくって、そこに安置して祈願すると、西風が吹いて筑紫に流れ着いたという話です。天皇がこれを聞いて望みを聞きますと、「郡をつくってお寺を建てたい」というので許可したという話です。つまり、お隣の伊予の豪族も百済救援にいつているわけです。そうしますと、同じように各地で豪族クラスが朝鮮半島に行っているのだろう、と推測されるわけです【スライド157】。

このような寺院造営の背景として、古墳時代の様子も気になっております。備中の場合、今回お話しいたしました秦原廃寺や栢寺廃寺などの背景には渡来系の人々がいたことが推測されます、この栢寺廃寺が建てられました賀夜郡の「賀夜」に関しましては朝鮮半島の伽耶の地が関わっていたのではないかと考えています。そしてこの地域でだんだん朝鮮系の資料がふえてきますと、この地域は伽耶と元々関係が深いのかなといいのかなと最近思うようになりまして、そうしますと栢寺廃寺をつくった、造営した人物は渡来系の人であった可能性があるのではないかと考えています。実は、似たような

・天智天皇3(664)年5月17日、百済の鎮將劉仁願は郭務
 悰らを遣わし、上表文を納めた函と献上物を進上した。
 ・12月12日、郭務悰らが帰国。
 ・是歳(664年)、対馬島・壱岐島・筑紫国などに防(さきもり)
 と烽(すすみ)を置き、筑紫に大堤を築いて水を貯えさせた。
 水城という。
 ・天智天皇4(655)年2月、百済の百姓男女400余人を近
 江国神前郡に住ませ、3月に田を賜った。
 ・665年8月、達率答木(火爾)春初(とうほんしゅんそ)を派遣
 して、長門国に城を築かせ、達率憶禮福留と四比福夫を筑
 紫国に派遣して大野城と椽城(基肆城)の2城を築かせた。

【スライド156】「白村江の戦い後の倭国の動き」

話が群馬県高崎市にあります。多胡郡という地域です。たくさんの胡人がいた郡というのですが、出土遺物を見ますと、やはりそのようなことがあるのかなと思います。山背でも似たような話もありますし、後に郡司クラスになる人もいます。先ほどの伊藤さんの備後地域のお話によりますと、備中などと同じように、この地域に渡来系の人々がもともと入っていたのではないかと考えられます。

最後に、お話ししておきたいことは、お寺さんをつくるときに、信仰心だけではなくて、現実的なものもあったであろうという話です。つまり何かと言いますと、お金の問題です。お堂を一つ造るのに、今のお金に換算して約10億円以上かかります。そしましたら、先ほど申し上げましたように、お堂をいくつも建てるということはとてもお金がかかります。そうしますと地方の財政は苦しいので、当時もなにか優遇措置があったのではないかと思います。現在でも、宗教法人には多少の経済的な援助、あるいは税制面での優遇などがありますが、これと同じことを古代にもやっていたのではないかと考えられます。そういう経済的な側面で援助することで実際に寺院を建てることのできたのではないかと思います【スライド158】。

今回のお話では、朝鮮半島の寺院のお話をまずいたしました。そして備後以外の吉備地域のお寺の話をして、備中ではその前代の朝鮮系考古資料のお話もしました。このような歴史的な流れの中で吉備地域に朝鮮半島と関わる寺院が建てられているのではないかと考えています。そしてそのようなあり方が、備後三谷寺の周辺にもあったのではないかと推測されました。

お寺さんは確かに宗教施設ではありますが、単に信仰心だけではできません。経済的な背景、技術的背景などがあってできるものと

***『日本霊異記』上巻第7「亀の命を買い取って放生し、現報を得て、亀に助けられる縁」**

備後三谿郡大領の先祖が三谷寺を建立

***『日本霊異記』上巻第17「戦争での災いにあつて、観音菩薩の像を信敬し、現報を得る縁」**

伊予国越智郡の大領の先祖の越智直が百済を救うために派遣され、唐の捕虜となり、観音菩薩像を手に入れ、厚く信仰した。松の木を伐って舟を造り、像を安置し、誓願すると、西風が吹き、筑紫に着いた。

天皇がこれを聞いて望みを聞くと、「郡を建ててお仕えしたい」というので、これを許した。それで彼は郡を建て、寺を造り、その観音像を安置した。

【スライド157】「白村江の戦いと瀬戸内の豪族の動き」

思います。その背景の中に朝鮮半島との関わりもあるのではないかと考えています。

どうも御清聴ありがとうございました。(拍手)

[国家の仏教政策]

・『日本書紀』大化元(645)年8月癸卯条「凡自天皇至于伴造、所造之寺、不能營者、朕皆助作。今拜寺司等與寺主。巡行諸寺、驗僧尼・奴婢・田畝之實、而盡顯奏。」

→国家による寺院造営の奨励策が地方に浸透?

→7世紀中頃から後半に地方で寺院が造営された。

・『日本書紀』天武天皇14(685)年3月壬申条「詔、諸国、每家、作佛舎、乃置佛像及經、以禮拜供養。」

→この奨励策により地方寺院が爆発的に増加?

【スライド158】「国家の仏教政策」

【おもな参考文献】

- ・大脇潔1989「七堂伽藍の建設」町田章編『古代史復元8 古代の宮殿と寺院』講談社
- ・岡本寛久1992『水切り瓦』の起源と伝播の意義」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』下、山陽新聞社
- ・岡山県立博物館2006『吉備の渡来文化』
- ・亀田修一1996「韓半島南部地域の瓦当裏面布目軒丸瓦」『碩晤尹容鎮教授退任記念論叢』
- ・亀田修一2006『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
- ・葛原克人1995「備中秦氏の造寺活動について」門脇禎二編『日本古代国家の展開』下、思文閣出版
- ・国立扶余博物館2008『百済王興寺』
- ・国立扶余博物館2009『百済伽藍に込められた仏教文化』

- ・妹尾周三1999「広島古瓦」脇坂光彦・小都隆編『考古学から見た地域文化』溪水社
- ・納谷守幸2005「軒丸瓦製作手法の変遷」『飛鳥文化財論 攷』納谷守幸氏追悼論文集刊行会
- ・奈良国立博物館1970『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術
- ・奈良文化財研究所飛鳥資料館1983『渡来人の寺』
- ・奈良文化財研究所2002『飛鳥・藤原京展』
- ・広島県立歴史民俗資料館1998『ひろしまの古代寺院 寺町廃寺と水切り瓦』
- ・松下正司1969「備後北部の古瓦」『考古学雑誌』55-1
- ・松下正司1993「水切瓦再考」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会
- ・湊哲夫・亀田修一2006『吉備の古代寺院』吉備人出版

出典一覧

- 【スライド2】(グーグルアースより)
- 【スライド4】(国立中央博物館 1998『国立中央博物館』)
- 【スライド5】(東潮・田中俊明 1995『高句麗の遺跡と歴史』)
- 【スライド6】(東潮・田中俊明 1995『高句麗の遺跡と歴史』中央公論社, 右下: 奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド7】(東潮・田中俊明 1995『高句麗の遺跡と歴史』中央公論社)
- 【スライド8】(東潮・田中俊明 1995『高句麗の遺跡と歴史』中央公論社, 右下: 奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド9】(国立慶州博物館 1991『慶州とシルクロード』)
- 【スライド10】(文化財庁・国立中央博物館 2007『発掘から展示まで』)
- 【スライド11】(東潮・田中俊明 1988『韓国の古代遺跡1 新羅篇』中央公論社, 左上: 奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド12】(国立慶州博物館 1988『皇龍寺址出土遺物』)
- 【スライド13】(国立慶州博物館 2000『新羅瓦磚』)
- 【スライド14】(国立慶州博物館 1988『皇龍寺址出土遺物』)
- 【スライド15】(国立慶州博物館 1988『皇龍寺址出土遺物』)
- 【スライド16】(奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド17】(国立慶州博物館 2000『新羅瓦磚』)
- 【スライド18・19】(絵葉書)
- 【スライド20】(国立中央博物館 2003『統一新羅』)
- 【スライド21】(国立扶余博物館 2009『百済伽藍に込められた仏教文化』)
- 【スライド23】(国立扶余博物館 1997『国立扶余博物館』)
- 【スライド25】(国立中央博物館 1986『国立中央博物館』)
- 【スライド27】(東潮・田中俊明 1989『韓国の古代遺跡2 百済・伽耶篇』中央公論社)
- 【スライド28】(国立扶余博物館 1997『国立扶余博物館』)
- 【スライド31】(国立扶余博物館 2009『百済伽藍に込められた仏教文化』)
- 【スライド33】(国立扶余博物館 1996『百済金銅大香炉と昌王銘石造舍利龕』)

- 【スライド34】(国立中央博物館 1999『百濟』)
- 【スライド35】(国立扶余博物館 1994『金銅龍鳳蓬萊山香炉』)
- 【スライド36・37】(国立中央博物館 1999『百濟』)
- 【スライド38】(国立扶余博物館 1996『百濟金銅大香炉と昌王銘石造舍利龕』)
- 【スライド39・40】(国立扶余博物館 2008『百濟王興寺』)
- 【スライド41】(左:国立扶余博物館 2008『百濟王興寺』, 右:奈良国立博物館 1970『飛鳥白鳳の古瓦』)
- 【スライド42~44】(国立扶余博物館 2009『百濟伽藍に込められた仏教文化』)
- 【スライド45】(国立中央博物館 1999『百濟』)
- 【スライド46】(絵葉書)
- 【スライド53・54】(国立中央博物館 1999『百濟』)
- 【スライド55・56】(国立中央博物館 1986『国立中央博物館』)
- 【スライド57】(林屋辰三郎 2003『仏教の伝来と受容』『週刊朝日百科42日本の歴史 古代2』朝日新聞社)
- 【スライド58・59】(奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド60】(納谷守幸2005『軒丸瓦製作手法の変遷』『飛鳥文化財論攷』)
- 【スライド61】(奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド62】(大阪歴史博物館 2004『古代都市誕生』)
- 【スライド63・64】(奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド65】(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004『天武・持統朝—その時代と人々—』)
- 【スライド66】(奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド67】(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004『天武・持統朝—その時代と人々—』)
- 【スライド68】(左:奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004『天武・持統朝—その時代と人々—』, 右:奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド69】(奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド70】(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004『天武・持統朝—その時代と人々—』)
- 【スライド71】(鈴木嘉吉監修 2002『古代の寺院を復元する』学研)
- 【スライド73】(奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)
- 【スライド74】(鈴木嘉吉監修 2002『古代の寺院を復元する』学研)
- 【スライド75~77】(奈良国立博物館 2004『法隆寺 日本の仏教美術の黎明』)
- 【スライド78】(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004『天武・持統朝—その時代と人々—』)
- 【スライド79】(鈴木嘉吉監修 2002『古代の寺院を復元する』学研)
- 【スライド81】(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2004『天武・持統朝—その時代と人々—』)
- 【スライド82】(松浦正昭 2004『日本の美術455飛鳥白鳳の仏像』至文堂)
- 【スライド84】(ゲーグルアースより)
- 【スライド85】(岡山県史編纂委員会 1991『岡山県史』第2巻原始・古代I)
- 【スライド87】(総社市教育委員会 1990『古代への誘い 吉備のくに総社』)
- 【スライド89】(上:岡山県立博物館 2006『吉備の渡来文化』)
- 【スライド90】(岡山県立博物館 2006『吉備の渡来文化』)
- 【スライド91】(岡山県教育委員会 1993『窪木薬師遺跡』)
- 【スライド92】(岡山県教育委員会提供)
- 【スライド93】(岡山県立博物館 2006『吉備の渡来文化』)
- 【スライド94】(岡山県教育委員会 1993『窪木薬師遺跡』)
- 【スライド95】(岡山県史編纂委員会 1991『岡山県史』第2巻原始・古代I)
- 【スライド96】(左:宮内庁書陵部陵墓課編 1997『山陵の遺寶』毎日新聞社, 右:国立中央博物館 1998『韓国古代国家の形成』)
- 【スライド98】(総社市教育委員会 1965『随庵古墳』)
- 【スライド101】(総社市教育委員会 1985『法蓮古墳群』)
- 【スライド103】(岡山県教育委員会 1997『奥ヶ谷窯跡ほか』)
- 【スライド105】(財大阪府埋蔵文化財協会 1993『須恵器の始まりをさぐる』)
- 【スライド108】(亀田修一 2004『五世紀の吉備と朝鮮半島』『吉備地方文化研究14』就実大学吉備地方文化研究所)
- 【スライド109】(右:国立中央博物館 2000『米』)
- 【スライド112】(岡山県教育委員会 2008『南溝手遺跡・窪木遺跡』)
- 【スライド114】(岡山県立博物館 2006『吉備の渡来文化』)
- 【スライド116】(左:総社市史編さん委員会 1987『総社市史考古資料編』, 右:奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999『蓮華百相』)
- 【スライド118~120】(湊・亀田 2006『吉備の古代寺院』吉備人出版)
- 【スライド121】(奈良国立博物館 1970『飛鳥白鳳の古瓦』)
- 【スライド123~125】(湊・亀田 2006『吉備の古代寺院』吉備人出版)
- 【スライド127】(広島県立歴史民俗資料館 1998『ひろしまの古代寺院 寺町廃寺と水切り瓦』)
- 【スライド137】(葛原克人 1995『備中秦氏の造寺活動について』門脇禎二編『日本古代国家の展開(下)』思文閣出版)
- 【スライド138】(亀田修一 1996『韓半島南部地域の瓦当裏面布目軒丸瓦』『碩晤尹容鎮教授退任記念論叢』)
- 【スライド142~144】(湊・亀田 2006『吉備の古代寺院』吉備人出版)
- 【スライド146】(亀田修一 2008『吉備と大和』土生田純之編『古墳時代の実像』吉川弘文館)
- 【スライド152】(『日本書紀』中央公論社 1987)
- 【スライド154】(奈良国立文化財研究所 2002『飛鳥・藤原京展』)